三重県埋蔵文化財調査報告227－8

広永横穴墓群・広永１号墳・広永城跡・広永遺跡発掘調査報告

2006（平成18）年３月

三重県埋蔵文化財センター

遺跡遠景

横穴 1 号墓

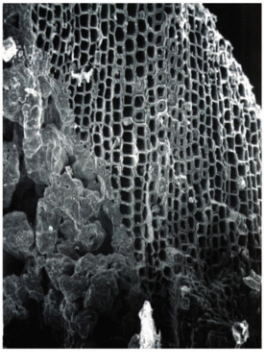
横穴 2 号墓

横穴 3 号墓

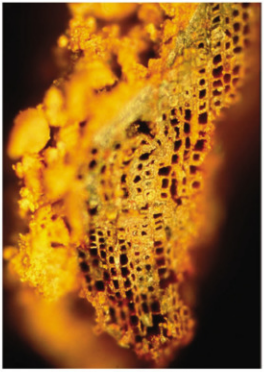
広永１号墳

金銅装大刀

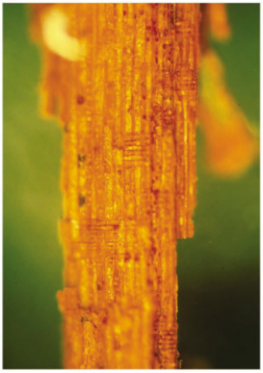
写真７－１　No. １金銅装直刀の分析箇所



ａ　木口面（SEM×100）



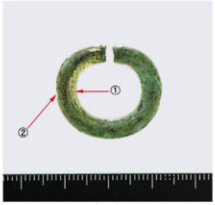
ｂ　木口面（落射×75）



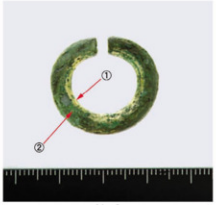
ｃ　柾目面（落射×75）

写真７－２　鞘木の木材組織

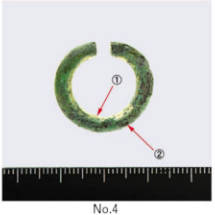
広永１号墳出土大刀の分析



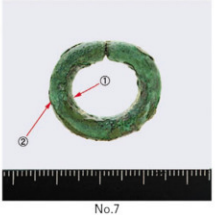
No.2



No.3

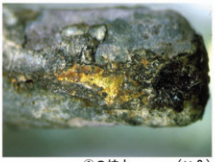


No.4

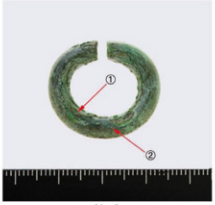


No.7

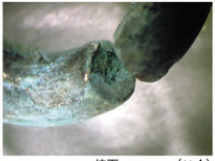
No.5



①の拡大　（× 8）



No.6



接面　（× 4）

耳環の分析箇所と顕微鏡写真

序

古来、亡き人を丁重に葬り、なおかつ生前の権威を誇示するために造られたもの―それが、古墳です。人々は死して後も自らが治めた土地を見守るかのように古墳を造りました。それは時代と共に様々なバリエーションを持つようになりましたが、そこに込められた思いは変わらないものだったでしょう。

今回、近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）建設に伴い調査が行われた広永遺跡では横穴墓という県下でも珍しい墓が1500年余りの年月を経て目を覚ましました。広永遺跡は現在、四日市市と三重郡朝日町にまたがる丘陵に位置していますが、当地域では他に金塚横穴墓群というやはり横穴墓群が発見されております。古墳ではなく横穴墓を造った点で独自性を持つ人々が暮らしていたと言えるでしょう。近年開発に伴う発掘調査が行われ、当地域が北勢地方でも有力な遺跡が集中していた地域であるということが分かってまいりました。今回の調査も周辺の墓制を考える上で貴重な成果をあげることができました。

しかしながら、当地域における首長墳などの古墳を含め、墓制に関する情報は未だ少ないのが現状です。この報告が地域の歴史を考える上で基礎資料となれば望外の喜びです。

最後になりましたが、調査にご協力頂きました地域の方々、中日本高速道路株式会社（日本道路公団中部支社）、同四日市工事事務所、三重県県土整備部高速道推進室、関係市町村教育委員会に感謝申し上げますと共に、今後とも県民の皆様に埋蔵文化財保護へのより一層のご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成18（2006）年

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　吉水康夫

例　　言

1　本書は三重県四日市市広永町字内ノ坪・三重郡朝日町大字埋縄字口山田に所在する広永横穴墓群・広永１号墳・広永城跡・広永遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT建設事業に伴うもので、調査にかかる費用は中日本高速道路株式会社が負担した。

3　発掘調査は三重県教育委員会が主体となり、三重県埋蔵文化財センターが担当した。調査面積は範囲確認調査316㎡、本調査970㎡である。発掘調査は、調査第二課第四係　主査　杉谷政樹（当時）の調整のもと、下記担当者が実施した。

平成９年度　範囲確認調査	調査担当	主事　服部芳人（当時）
	調査作業受託	株式会社　四門
	調査期間	平成9年11月21日～12月18日
平成10年度　本調査	調査担当	主事　田中久生（当時）
	臨時技術補助員	田中美穂
	調査作業受託	リメックス株式会社
	調査期間	平成10年7月2日～11年1月14日

4　本書の執筆は、調査研究Ⅱグループ　主査　竹田憲治・技師　角正淳子が、編集は角正が行った。文責は目次及び各文末に示した。

5　本書に掲載した遺構写真の撮影は、上記調査担当者及び調査作業受託機関が行い、遺物写真の撮影は竹田憲治・田中久生が行った。

6　自然科学調査として、出土金属製品の分析を財団法人元興寺文化財研究所に、出土人骨の分析を松下孝幸氏（山口県土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）に委託した。出土金属製品の分析結果は第Ⅷ章に、出土人骨の分析結果は『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2002）第Ⅴ章に掲載した。

7　調査及び本書の作成にあたっては、下記の方々にご指導を得た。記して感謝の意を表します。（順不同、敬称略）
津村善博、池上悟、城ヶ谷和広、堀木真美子、西山要一、渡邊博人

8　当遺跡に付いては、既に『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅰ・Ⅱ（1998・1999）にその概要を公表しているが、本書をもって正式報告とする。

9　本書で報告した記録類及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

凡　　例

1　調査は国土座標第Ⅵ系の座標軸に準拠して行い、当報告でもそれに拠って記述しているため、本書で示す方位は国土座標第Ⅵ系の座標北を用いている。従って世界測地系・測地成果2000には対応していない。なお、国土座標系第Ⅵ系の座標北に対し、磁北は6°50′西に振れている。（平成元年現在）

2　本書では下記の略記号を用い、見た目の性格を表したほか、古墳及び横穴墓に関しては遺跡台帳登録名も併記している。なお、この記号は調査時に使用したものと同じである。

ＳＡ：土塁、ＳＤ：溝・堀、ＳＫ：土坑、Ｐ：ピット、ＳＸ：墓

3　本書に掲載した図面の縮尺は、遺構図は１：100、遺物図は１：４を基本とし、適宜１：２、１：20などのものもある。全ての図面にはスケール・方位を付した。また、横穴墓の計測数値に関しては第12図の部分を計測した。

4　本書で使用した土層及び遺物の色調は、小山・竹原編『新版標準土色帖』（1997年版）を使用した。

5　遺物観察表の内容は以下の法則にのっとって記述している。

- 報告番号：遺物図版と照応した番号である。
- Ｒ番号：遺物実測時に付与した番号である。
- 器　　種：須恵器・土師器などの種類を示した。
- 器　　形：形状を示した。
- 遺構名：報告書で認定した遺構名である。
- 出土地区：出土した場所を設定した地区で表示した。
- 出土位置：出土した時点での出土場所の名称である。（遺構名・層位などの組み合わせ）
- 取上げ番号：出土時に出土状況図を作成し、取上げる際に付与した番号である。
- 法　　量：口径・器高・底径・重量などを計測した。
- 胎　　土：混和材を除いた素地の緻密さを目視で「密～粗」で区分し、混和材については主な大きさを示した。
- 焼　　成：目視で「良～不良」に区分した。
- 色　　調：代表的な色調を示した。
- 残　　存：土器に関しては12／12を完存とし、12分割した比率で示した。
- 備　　考：その他必要と考えられる情報を示した。

6　写真図版の遺物番号は挿図の番号と一致している。また、いずれも縮尺不同である。

本 文 目 次

Ⅰ　前言 ……（角正淳子）…… 1
Ⅱ　位置と環境 ……（角正）…… 3
Ⅲ　遺跡の現況と層序 ……（角正）…… 9
Ⅳ　広永横穴墓群 ……（角正）…… 13
Ⅴ　広永１号墳 ……（角正）…… 37
Ⅵ　広永遺跡 ……（角正）…… 42
Ⅶ　広永城跡 ……（竹田憲治）…… 46
Ⅷ　自然科学分析 ……（（財）元興寺文化財研究所）…… 52
Ⅸ　まとめ ……（角正・竹田）…… 57

図 版 目 次

第１図　調査区位置図 …… 1
第２図　試掘坑位置図 …… 1
第３図　調査区地区設定図 …… 3
第４図　遺跡周辺地質図 …… 5
第５図　遺跡位置図 …… 6
第６図　陰涼寺山古墳群位置図 …… 7
第７図　山辺横穴墓群位置図 …… 8
第８図　半田横穴群位置図 …… 8
第９図　調査区上層断面図 …… 9
第10図　調査前測量図 …… 10
第11図　遺構平面図 …… 11
第12図　横穴墓計測位置 …… 13
第13図　横穴１号墓展開図 …… 14
第14図　横穴１号墓遺構平面図及び
　　墓道部遺物出土状況図 …… 15
第15図　横穴１号墓上層断面図 …… 16
第16図　横穴１号墓出土遺物実測図 …… 17
第17図　横穴２号墓展開図 …… 18
第18図　横穴２号墓玄室内遺物出土状況図 …… 19
第19図　横穴２号墓遺構平面図及び上層断面図　20
第20図　横穴２号墓上層断面図 …… 21
第21図　横穴２号墓墓道部遺物出土状況図 …… 22
第22図　横穴２号墓墓道部遺物出土状況図 …… 23
第23図　横穴２号墓出土遺物実測図 …… 24
第24図　横穴３号墓展開図 …… 25
第25図　横穴３号墓玄室内遺物出土状況図 …… 26
第26図　横穴３号墓玄室内遺物出土状況図 …… 27
第27図　横穴３号墓遺構平面図及び
　　上層断面図 …… 28
第28図　横穴３号墓土層断面図及び
　　墓道部遺物出土状況図 …… 29
第29図　横穴３号墓墓道部遺物出土状況図 …… 30
第30図　横穴３号墓出土遺物実測図 …… 31
第31図　横穴４号墓遺構平面図及び上層断面図　32
第32図　横穴５号墓及び横穴６号墓
　　遺構平面図、上層断面図 …… 33
第33図　土器集中部遺構平面図 …… 34
第34図　土器集中部遺物出土状況図 …… 35
第35図　土器集中部出土遺物実測図 …… 36
第36図　広永１号墳遺構平面図及び上層断面図　38
第37図　広永１号墳上層断面図 …… 39
第38図　広永１号墳玄室内遺物出土状況図 …… 40
第39図　広永１号墳奥壁展開図及び
　　出土遺物実測図 …… 41
第40図　ＳＸ３遺構平面図及び上層断面図、
　　遺物出土状況図 …… 43
第41図　ＳＤ18遺物出土状況図及び上層断面図　44
第42図　遺構出土遺物実測図 …… 44
第43図　包含層出土遺物実測図 …… 45
第44図　城跡上層断面図 …… 46
第45図　城跡関係遺構配置図 …… 47
第46図　耳環計測位置 …… 53
第47図　膜状物質のFT－IRスペクトル …… 54
第48図　漆膜標準試料のFT－IRスペクトル …… 54

第49図　耳環（54）①のXRFスペクトル …… 55
第50図　耳環（54）②のXRFスペクトル …… 55
第51図　耳環（55）①のXRFスペクトル …… 55
第52図　耳環（55）②のXRFスペクトル …… 55
第53図　耳環（56）①のXRFスペクトル …… 55
第54図　耳環（56）②のXRFスペクトル …… 55
第55図　耳環（57）①のXRFスペクトル …… 56
第56図　耳環（57）②のXRFスペクトル …… 56
第57図　耳環（28）①のXRFスペクトル …… 56
第58図　耳環（28）②のXRFスペクトル …… 56
第59図　耳環（29）①のXRFスペクトル …… 56
第60図　耳環（29）②のXRFスペクトル …… 56
第61図　朝明郡内の横穴墓 …… 58
第62図　墳丘と横穴墓 …… 59
第63図　北伊勢の中世城館 …… 62
第64図　広永城跡概念図 …… 63

表　目　次

第１表　横穴墓一覧表 …… 13
第２表　遺物観察表 …… 48
第３表　遺物観察表 …… 49
第４表　遺物観察表 …… 50
第５表　遺物観察表 …… 51
第６表　耳環一覧表 …… 53

写　真　目　次

巻頭カラー１　遺跡遠景
巻頭カラー２　横穴１号墓
巻頭カラー３　横穴２号墓
巻頭カラー４　横穴３号墓
巻頭カラー５　広永１号墳
巻頭カラー６　金銅装大刀
巻頭カラー７　広永１号墳出土大刀の分析
巻頭カラー８　耳環の分析箇所と顕微鏡写真

写真１　八郷地区市民センター見学
写真２　現地説明会
写真３　作業風景
写真４　作業風景
写真５　丸玉の穿孔方向

図版１　調査前風景／遺跡全景
図版２　調査区全景／横穴墓群
図版３　横穴１号墓　ＳＸ１／
横穴１号墓半裁状況
図版４　横穴１号墓礫出土状況／
横穴１号墓線刻礫出土状況
図版５　横穴２号墓　ＳＸ11
図版６　横穴２号墓玄室礫出土状況／
横穴２号墓土層堆積状況／
横穴２号墓土層堆積状況
図版７　横穴３号墓　ＳＸ７
図版８　横穴３号墓／
横穴３号墓玄室内遺物出土状況／
横穴３号墓人骨出土状況
図版９　横穴３号墓／
横穴３号墓墓道部遺物出土状況／
土器集中部遺物出土状況
図版10　広永１号墳　ＳＸ13／
広永１号墳玄室
図版11　広永１号墳玄室奥壁／奥壁石材
図版12　広永１号墳玄室内大刀出土状況／
金銅装大刀鞘口金具
図版13　方形周溝墓ＳＸ３／
北側周溝遺物出土状況
図版14　広永城跡／広永城跡土塁
図版15　工事前遠景／工事後遠景
図版16　横穴１号墓出土遺物
図版17　横穴２号墓出土遺物
図版18　横穴３号墓出土遺物
図版19　広永１号墳出土遺物
図版20　広永１号墳出土金銅装大刀
図版21　広永遺跡出土遺物

Ⅰ　前　　言

1　調査の経過

広永横穴墓群・広永古墳群・広永城跡・広永遺跡は周知の遺跡である。昭和63年の近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）建設事業の事業照会にあたり、当遺跡が事業予定地内に含まれていることが判明した。平成９年度に三重県埋蔵文化財センターが範囲確認調査を行い、日本道路公団（当時、現・中日本高速道路株式会社）との協議の結果、発掘調査を行うこととなった。調査にいたる契機については『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡』に詳述してあるので、そちらを参照していただきたい。なお、文化財保護法等（以下、法）にかかる諸手続きは以下の通りである。

- 法第98条第２項（文化庁長官あて）
  平成10年６月19日付　教生第107号
- 遺失物法第１条第１項に伴う発見・認定通知
  （四日市市北警察署長あて）
  平成11年４月５日付　教生第４－２号

2　発掘作業の経過

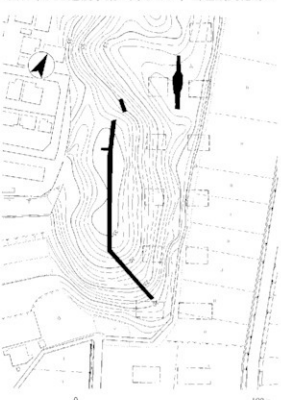
①　調査の計画

平成９年度に事業予定地2,600㎡について範囲確認調査を行った。範囲確認調査面積は316㎡である。その結果、古墳もしくは古墳時代の集落の可能性が考えられたため、平成10年度に尾根頂部を中心に840㎡の本調査を行った。さらに発見された横穴墓群の広がりを確認するため、130㎡の追加調査を行った。最終的な調査面積は970㎡である。調査期間は平成10年７月２日～平成11年１月14日である。

②　調査の体制

近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT建設事業に関しては、当埋蔵文化財セ

第１図　調査区位置図（１：2,000）



第２図　試掘坑位置図（１：2,000）

ンターの調査体制に組み込む形で民間発掘調査会社に発掘調査作業を委託している。詳細な体制については『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡』に述べられているのでここでは割愛する。当遺跡については、平成９年度に行った範囲確認調査は株式会社四門、平成10年度に行った本調査はリメックス株式会社が受託した。

③　調査の経過

発掘調査の民間発掘会社導入初年度にあたり、体制から細かな作業指示まで手探りの状態であったため、不備や手戻りなど苦労することもあった。その中、調査としては県下初の横穴墓調査となり県内の墓制に新たな情報を加えた意義は大きい。

《調査日記抄》

平成10年６月30日　事前測量
　　７月13日　重機による表土除去
　　７月14日　北西部から人力掘削開始
　　８月21日　八郷地区市民センター見学
　　８月24日　堀割掘削開始
　　８月28日　Ｄ５・６地区で遺物が集中して出土
　　８月31日　ＳＸ１検出
　　９月８日　ＳＸ７検出（横穴墓の想定がなされる）
　　９月９日　ＳＸ８検出
　　９月11日　ＳＸ９～11検出
　　９月21日　台風７号のため作業中止
　　10月６日　ＳＸ13検出。人頭大の礫が並ぶことを確認。
　　10月16日　池上悟氏調査指導
　　10月26日　調査区南東部全景写真撮影
　　11月１日　現地説明会
　　11月２日　ＳＸ13　大刀出土
　　11月５日　ＳＸ11　耳環出土
　　11月６日　ＳＸ７　耳環出土
　　11月９日　ＳＸ７　耳環周囲より歯、玉出土
　　11月11日　ＳＸ13　大刀取り上げ
　　11月12日　津村善博氏調査指導
　　11月16日　出土金属遺物の調査指導のため

写真１　八郷地区市民センター見学

写真３　作業風景

写真２　現地説明会

写真４　作業風景

奈良大学保存科学研究室へ。

11月24日　調査区南全景写真撮影

11月25日　ＳＸ11出土状況写真撮影

11月26日　ＳＸ11図面作成

12月２日　調査区北部全景写真撮影

12月８日　ＳＸ７・11　写真撮影

12月９日　遺構図作成開始

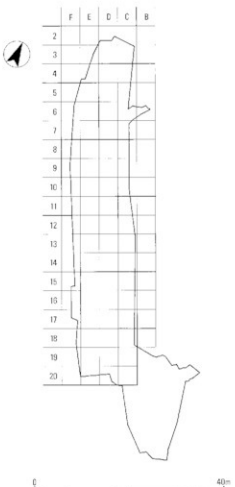
12月22日　調査後地形測量

平成11年１月12日　追加調査

１月14日　埋め戻し終了

④　普及・公開

普及・公開としては、調査途中の11月1日に現地説明会を行い、150名の参加を得た。また、調査期間中に地元の八郷地区市民センターや員弁郡教育研究会の見学・研修が、現地で行われた。その他、高速道開通時のイベントでの遺物公開等を行っている。



第３図　調査区地区設定図（１：800）

⑤　調査の方法

地区設定　計画路線に平行して任意に設定した。４ｍに区切り南北方向に１から、東西方向にアルファベット（Ｂから）をつけ、その組み合わせで北東部隅をその地区の名称とした（例―Ｃ３、Ｄ５など）。したがって、国土座標第Ⅵ系には一致しない。

表土除去　重機（バックフォー）を使用した。

遺構検出・掘削　表土除去後、人力で行った。

遺構番号の付与　当センターの基本にのっとり、遺構は種別を表す略記号のあとに通し番号をつけた（例―ＳＸ１、ＳＤ18など）。ピットに関しても数が少なかったことから、遺構と同じ通し番号を付与した。しかし、調査途中で横穴墓が複数確認されたこともあり、遺跡台帳登録時に古墳・横穴墓については新たに名称を付与した（第１表参照）。本報告では便宜上、両方の名称を併記しておく。なお、遺跡が行政区分上２つの市町村（四日市市・朝日町）にまたがるため、遺跡登録は同じ名称でそれぞれに行われ、番号が付与されている。各番号は巻末の報告書抄録に記した。

⑥　調査の記録

遺構カード　地区ごとに縮尺１：40で作成し、略図・土質・重複関係を記し、また遺構番号の付与、及び遺物取上げ時の台帳として使用した。

遺構実測　基本的に手描きで縮尺１：10もしくは１：20の図面を作成した。適宜１：１で作成したものもある。これらの図面には通し番号を付与した。

遺構写真　基本的に４×５インチ判のモノクロフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、適宜ブローニー判も使用した。また補助・メモ的に35㎜モノクロフィルム・カラーリバーサルフィルム・カラーネガフィルムを使用した。

3　整理作業の経過

①　全体計画

近畿自動車道名古屋神戸線（第２名神）事業については大規模かつ短期間の調査であること、また調査地が当センターから離れた場所にあることから利便性等を勘案し、現場近くにプレハブ整理所を建設し整理作業を行っている。調査終了後、随時作業を行っているが、他事業との兼ね合いもあり調査順に

作業を行っているわけではない。当遺跡については調査・整理担当の異動等で、整理が遅滞した感は否めない。

基本的に調査・整理時に作成した実測図の縮尺を適宜変更して下図を作成し、手描きトレースを行った。このトレース図を版下として使用した。報告書作成後はこれらの下図・版下は破棄している。

② 作業体制

基本的に当センター職員により行っている。当遺跡については先述したように調査時と整理時の担当が異なっている。以下に整理担当者を明記しておく。

調査研究Ⅱグループ　技師　　角正　淳子

なお、業務補助員として以下の協力を得た。

有満俊江・新貝里美・樫野幸子・木村真弓

松﨑由里・和田佐映子・石橋秀美・楠純子

③ 整理の記録

洗浄・注記・接合　取り上げ後、速やかに整理所にて水洗・注記・接合作業を行った。なお、注記内容としては出土地区・遺構名・出土年月日などである。さらに出土した際に記録したカードも一緒に小箱に入れて整理している。

遺物実測　出土した遺構・層位によって分け、任意に抽出して縮尺１：１で手描き作成した。また、紙単位で番号を付与し、遺物・図面双方の整理時における登録番号（R No.）として使用した（例：001-01）。

遺物写真　報告書に掲載した遺物の中から任意に抽出し撮影した。基本的にブローニー判のモノクロフィルムを使用し、適宜４×５インチ判のモノクロフィルム・リバーサルフィルムを使用した。

収蔵　報告書掲載遺物は登録番号・報告番号を更に注記した後、ラベルと共に市販のコンテナボックスで収蔵している。また未掲載遺物は遺構・出土地区単位でラベルと共に袋詰めし、市販のコンテナボックスに収蔵している。図版・写真等は市販のアルバムなどを使用して整理した後、収蔵している。いずれの資料も当センターにて保管している。

④ 保存処理・分析

金属遺物　古墳出土の直刀は取り上げ後、すぐに奈良大学保存科学研究室の協力を得てＸ線透過写真を撮影し、処理についての助言を得た。その後平成11年度に財団法人元興寺文化財研究所に保存処理・分析を委託し、実施している。古墳出土の直刀には、鞘と思われる木質部分が存在し、漆膜状の物質が確認できたため、その同定及び木質の材同定を行った。また、横穴墓出土の耳環は製作方法の解明を目的とし材質の分析を行っている。分析結果については第Ⅷ章を参照していただきたい。いずれの金属遺物も洗浄・脱塩（防錆）・樹脂による強化・接合・復元を行っている。直刀は木質部分の保護のため、脱塩期間を通常より短く取っており、処理後も温湿度の安定した収蔵庫から長期間出しておくことを控えている。

人骨　横穴墓出土の人骨は土ごと取り上げた後、山口県土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムへ運び、松下孝幸氏に人骨の同定・保存処理を委託した。分析結果は『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡』第Ⅴ章に掲載されているのでそちらを参照していただきたい。遺物は土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムで保管されている。

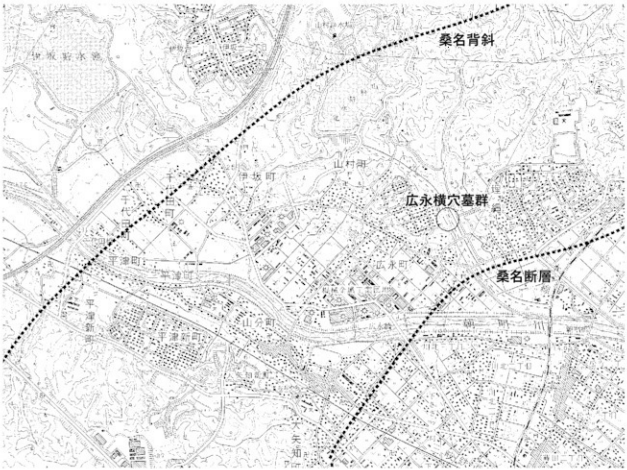
Ⅱ　位置と環境

広永横穴墓群・広永古墳群・広永城跡・広永遺跡は、三重県北部、行政区分上四日市市広永町と三重郡朝日町にまたがって位置する。遺跡は後述するように丘陵上に立地しているが、周辺は昭和30年代後半に団地造成が行われ、本来の地形はかなり改変を受けている。

1　地理的環境

当遺跡が立地しているのは朝明川下流北岸の朝日丘陵上である。朝明川は三重県北部に流れる中小河川の一つで、鈴鹿山脈に源を発し、丘陵帯や洪積台地を開析しながら、沖積低地を形成し伊勢湾に注いでいる。丘陵帯は四日市市小牧町付近を中心としたドーナツ状に配列しており、朝日丘陵はその中でも海岸よりに位置している。朝日丘陵は小河川の樹枝状支流によって、複雑な刻み込みを受けているが、遺跡はその丘陵の南東隅、標高35m程度に位置している。遺跡の1.2km北西には桑名背斜と呼ばれる褶曲構造、南には桑名断層が走っている。

地質的に見ると、泥層と砂層からなる大泉累層（Ｔｏ）と呼ばれる層を基盤としているが、前述したように桑名背斜と桑名断層の間に位置するため南に大きく傾斜している。調査区内では、北側から順に泥・シルト・砂層となり、尾根頂部以南は大泉累層の上に中位段丘堆積物である礫層がみられる。横穴墓群は大泉累層のひとつである砂層を掘りこんで造られている。



第４図　遺跡周辺地質図（１：25,000）〔国土地理院地形図『菰野』・『桑名』に加筆〕

2　歴史的環境

当遺跡が位置する周辺には、内ノ坪遺跡、城ノ谷遺跡など弥生時代から古代にかけての集落遺跡が確認されている。また同じ朝日丘陵上には西ヶ広遺跡、伊坂城跡、菟上遺跡、金塚遺跡、山村遺跡など弥生時代から中世にかけての遺跡が位置している。近年、当事業を含め開発に伴う発掘調査が集中して行われており、当地域の様相が少しずつ明らかになってきている。当地域の歴史的変遷はこれらの開発に伴う発掘調査報告書で詳述されており、ここでは全体的な変遷ではなく横穴墓に関して県内の状況を述べることにする。

県内で現在までに確認されている横穴墓は四日市市４遺跡、鈴鹿市、亀山市、津市でそれぞれ１遺跡である。いずれも県中北部に位置し、南部では確認されていない。以下、北から順に述べる。

四日市市金塚横穴墓群　平成10年、近畿自動車道名古屋神戸線（第２名神）建設事業に伴う発掘調査で４基が発見された。朝明川北岸の朝日丘陵上に位置し、当遺跡とは北西に約0.5km離れている。丘陵中腹の西斜面に造営されているが、後世の土取りや撹乱によって破壊されており、他にも存在した可能性もある。確認できたうち最も残りのよいものは、玄室平面形が長さ2.9m、幅2.2mの略長方形を呈し、羨道部との境に明瞭な袖を持っている。いずれの横穴墓も天井部が崩落しており、天井部の形態は不明である。人骨片や金銅製の耳環、銀製の梔子形空玉などが出土している。

四日市市菟上遺跡　平成12年、県道建設事業に伴

第５図　遺跡位置図（１：25,000）〔国土地理院地形図『桑名』に加筆〕

う発掘調査で1基発見された。同じく朝明川北岸の朝日丘陵上に位置し、当遺跡とは約12km北西に離れている。丘陵を刻み込む谷に面する北側斜面に造営されたものだが、谷の浸食のため、玄室部分が残存していただけである。玄室の平面形は長さ2.4m、幅1.4mの略方形を呈する。天井部は崩落しており、形態などは不明である。玄室内には石は見られず、須恵器杯・耳環が出土したのみである。

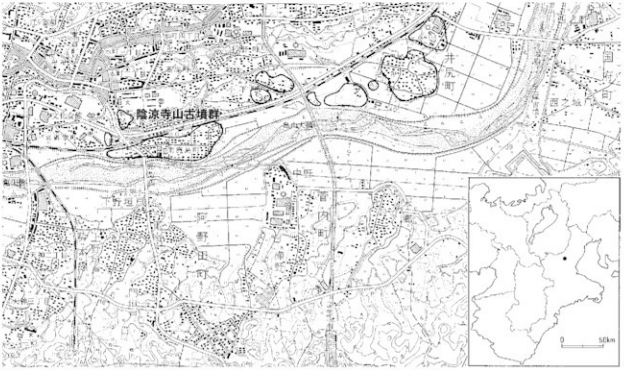
四日市市死人谷横穴古墳群[7]　朝明川南岸の垂坂丘陵上に位置した横穴墓群である。鈴木敏雄氏の『羽津村考古誌考』によれば、16基の横穴墓が存在したらしいが、昭和10年代に削平をうけ消滅したという。赤褐色の頁岩・礫岩に2m×4m程の玄室が造営され、天井部は弧状を描いていたという。玄室内には人骨や土器片があり、その一部が四日市市萬古工業会館に伝えられている。また、金銅製双龍環頭と金銅装大刀が出土したと伝えられ、これらは東京国立博物館に所蔵されている。

亀山市陰涼寺山古墳群[8]　昭和8年の土取り工事の際発見された横穴墓群である。亀山市内を流れる鈴鹿川北岸の丘陵上に位置し、周辺には陰涼寺山1号墳など古墳も存在している。昭和8年に書かれた鈴木敏雄氏の『亀山町考古誌考』によると、西に面した斜面にほぼ同じ標高で南北に10余基が存在したらしいが、現在は4基が確認できるのみである。玄室の平面形は略方形をなし、幅2m、長さ10～13m、高さ2mを測ったという。玄室内には丸石がみられ、須恵器蓋杯・平瓶・高杯、鉄釘などが出土したと記されている。

鈴鹿市山辺地下式横穴[9]　昭和27年の土取り工事中に発見された3基の横穴である。名古屋大学考古学研究室によって調査が行われている。並行して掘られた2基と、そのうちの一つから枝分かれして1基が掘られている。天井はカマボコ形を呈していたらしい。玄室部分は幅1.5～1.9m、長さが並行する2基が3.9～4.7m、もう一つが2.3m、高さ1.8～2mを測る。いずれの横穴も灯明皿として使用したとみられる土師器皿が発見されている。

半田横穴群[10]　津市西部の半田丘陵上に位置する。横穴の存在と須恵器の出土から横穴墓群とされ、4基が遺跡地図に掲載されている。

このように、県内で確認されている横穴墓は詳細が明らかなものが少なく、その分布や構築などを語る段階ではない。従来の調査で見逃されてきた可能性も高く破壊されてしまったものもあるだろう。しかしながら、それでも横穴墓の分布傾向として県内



第6図　陰涼寺山古墳群位置図（1：25,000）〔国土地理院地形図『亀山』に加筆〕

北部に偏っており、なかでも三重郡・朝明郡に集中していることは認めてもよいだろう。時期的に多少のずれは今後も生じるだろうが、現段階での時期設定から考えると横穴墓が作られた時期は朝明郡では目立った古墳がみられないことからも、当地域に居住する人々が横穴墓を墓制の一つとして認識していたといえよう。当地域は秦氏をはじめとした渡来系氏族の存在が文献史料から窺い知られており[8]、これらとの関連が注目される。

註

① 津村善博氏のご教示による

② 服部芳人ほか『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、2001）

③ 穂積裕昌ほか『菟上遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2005）

④ 鈴木敏雄『羽津村考古誌考』
『四日市市史』第２巻　史料編　考古Ⅰ（四日市市、1993）

⑤ 鈴木敏雄『亀山町考古誌考』
『亀山市埋蔵文化財分布地図』（亀山市教育委員会、1993）

⑥ 『鈴鹿市史　第１巻』（鈴鹿市教育委員会、1980）
『鈴鹿市遺跡地図』（鈴鹿市教育委員会、1987）

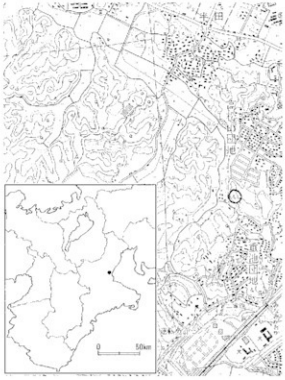
⑦ 『津市遺跡地図』（津市教育委員会、1988）

⑧ 河野勝行「五－六世紀における伊勢－「神宮」成立史研究のための試考」大阪歴史学会編『古代国家の形成と展開』（吉川弘文館、1976）

参考文献

吉田史郎ほか編『桑名地域の地質』（地質調査所、1991）
田中久生「三重県の横穴墓－伊勢平野の現状－」『静岡県考古学会2000年度シンポジウム　東海の横穴墓』（静岡県考古学会シンポジウム実行委員会、2001）

第７図　山辺横穴墓群位置図（１：25,000）
〔国土地理院地形図『鈴鹿』に加筆〕

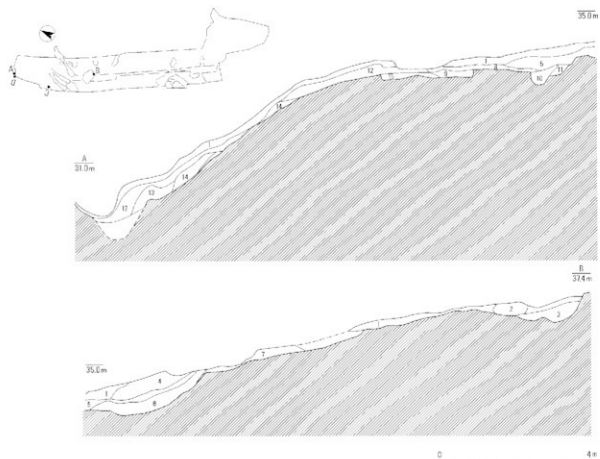


第８図　半田横穴墓群位置図（１：25,000）
〔国土地理院地形図『津西部』に加筆〕

Ⅲ　遺跡の現況と層序

調査区は朝日丘陵の南東隅、標高37m付近に位置する。小河川による刻み込みを受け、調査区の西側には小さな谷が入っており、比高差は10m程である。南・東側の丘陵端には水田が迫っており、水田との比高差は20～25mである。調査区は丘陵の頂部東半分を中心とし設定された。調査区内には尾根が2つ存在し、北尾根頂部が標高37m、南尾根頂部が35mを測る。調査前は竹林として利用されていた。

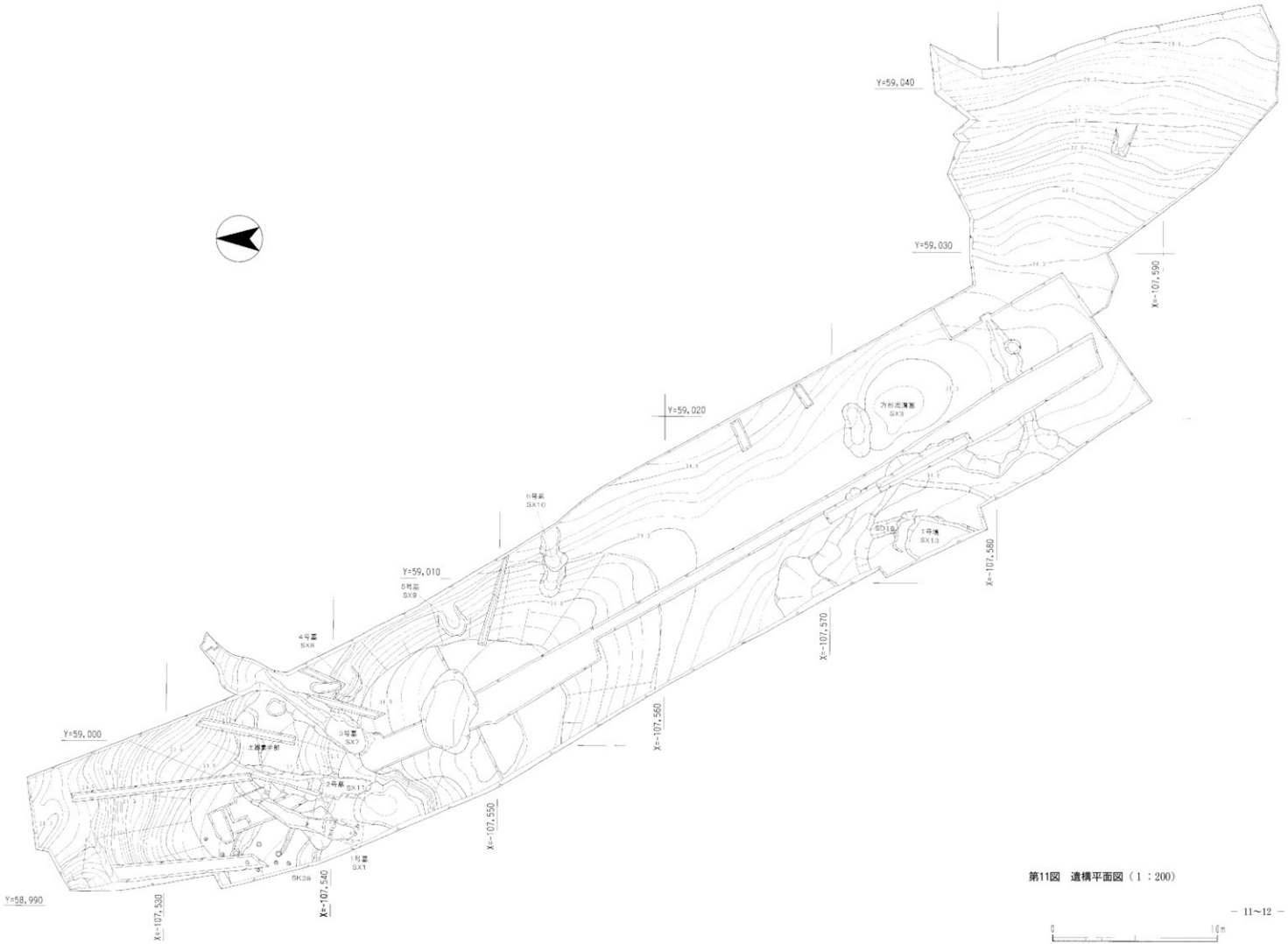
基本的な層序は1層目：表土、2層目：明黄褐色土、3層目：地山である。地山は黄褐～明黄褐色の砂質土が主であるが、シルト・泥で構成される部分もある。これは、前述したように東海層群のひとつ大泉累層（Ｔｏ）分布域に位置するためで、大泉累層は砂～シルト～泥のサイクルで変化がみられることからそれを反映しているものと推測される。また、北尾根頂部より南は、大泉累層の上を中位段丘堆積物である礫層が覆っている。



1. 表土　（腐食土。）
2. 5Y6/3　オリーブ黄土、5Y5/3 灰オリーブ砂岩系地山ブロックとの互層
3. 2.5Y6/6　明黄褐色土。
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色土、固くしまる。
5. 10YR4/6 褐色砂質土。(旧表土。)
6. 10YR5/6 黄褐色土、14がブロック状に入る。
7. 10YR6/6 明黄褐色土、花崗岩の風化した様。
8. 10YR5/4 にぶい黄褐色土、5と地山の混合?
9. 10YR5/6 黄褐色土、やや粘性を帯びる。
10. 2.5Y5/4　黄褐色ややや砂質土。若干炭化物が混入する。(SD-1)
11. 2.5Y5/6　黄褐色ややや砂質土。若干炭化物が混入する。
12. 10YR6/6 明黄褐色土。
13. 2.5Y5/4　黄褐色土、14よりやや暗い。
14. 2.5Y5/4　黄褐色土、白色粒子及び細小石を含む。
15. 2.5Y7/6　明黄褐色土、白色粒子及び小石を含む。

第9図　調査区土層断面図（1：100）

第10図　調査前測量図（1：400）



第11図　遺構平面図（1：200）

Ⅳ　広永横穴墓群

北側の尾根頂部に横穴墓３基、横穴墓の痕跡とみられる土坑を３基、計６基を確認した。いずれも大泉累層（Ｔｏ）と呼ばれる砂層を掘りこんで作られている。以下に各遺構・遺物について詳述する。横穴墓の規模は、第12図の場所を計測した値である。

なお、須恵器については城ヶ谷和広氏、渡邊博人氏に実見していただき、時期・器種などを決定した。また、石製品については堀木真美子氏に実見していただき石材を決定した。赤色顔料については、肉眼では判断できないことから、堀木真美子氏のご協力を得て、堀場製作所製ＸＧＴ－5000で蛍光Ｘ線分析を行った。分析は大気条件下で行っている。

１　１号墓（ＳＸ１）

遺構（第13～15図）

玄室：長さ　2.6m　幅　1.6m　高さ　1.0m

床面積　4.2㎡

平面形態　方形

天井形態　（横断面）アーチ形？

（縦断面）不明

墓道：長さ　6.3m　　幅　0.8m

調査区北側の尾根頂部に位置し、東側斜面を頂部に向かって掘りこんでいる。横穴墓群の中では最も北側に位置する。玄室は崩落土及び流入土によって埋没していた。玄室内の埋土の観察所見からは流入土で埋まった後、天井の崩落があったと考えられ、その後も流入・崩落が繰り返されたと推察できる。土層図から判断すると、天井部は奥壁に向かってやや低くなっているが、奥壁は垂直に立ちあがり、側壁はややアーチを描いて立ちあがっていることや、玄室の平面形態が長方形を呈していることから、天井形態はアーチ型ではないかと考えられる。玄室の主軸はＮ14°Ｅを測る。玄室床面の標高は約32.9mを測り、１～３号墓の中で最も低い。玄室と墓道の境は明瞭でないが、10cmほどの段差があり、この段差部分が入口に相当すると考えられる。玄室床面は墓道から低くなった後、奥壁に向かって緩やかに高くなっている。玄室入口付近や墓道にも閉塞施設はみられなかった。玄室内には20cm前後の石が奥壁に対し平行に２列並べられ、うち手前列中央のひとつに線刻が見られた。玄室内からは特に遺物は出土していない。

墓道は玄室から見て東側に弧を描いている。玄室入口付近の墓道埋土からまとまって遺物が出土しているが、いずれも墓道がある程度埋没した後、一気に堆積した埋土から出土している。

遺物（１～12、第16図）

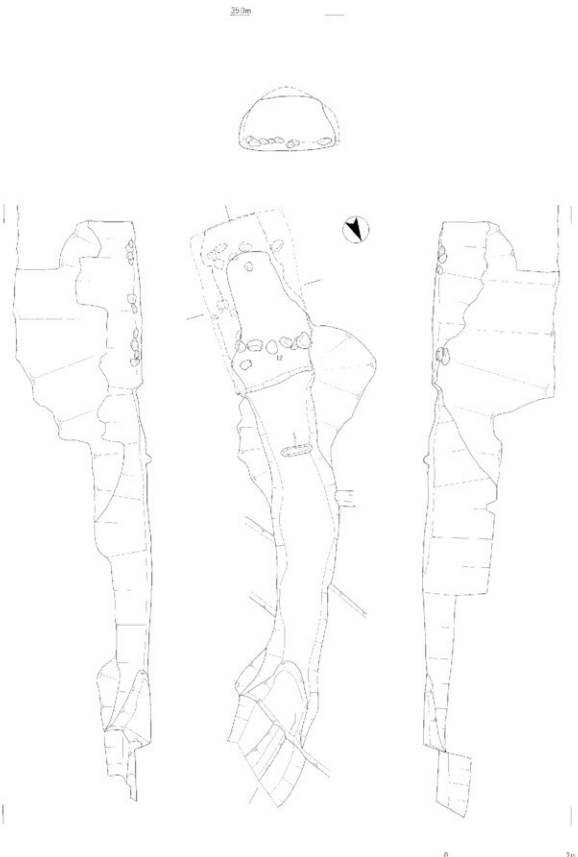
須恵器（１～８）

１～３は杯Ｇ蓋である。３は猿投産だが、１・２は在地産と見られる。３はＨ50期のものとみられ、他２点も同様の時期のものと考えてよいだろう。４～６は杯Ｇ身である。４はＨ50期の猿投産のものと

第12図　横穴墓計測位置

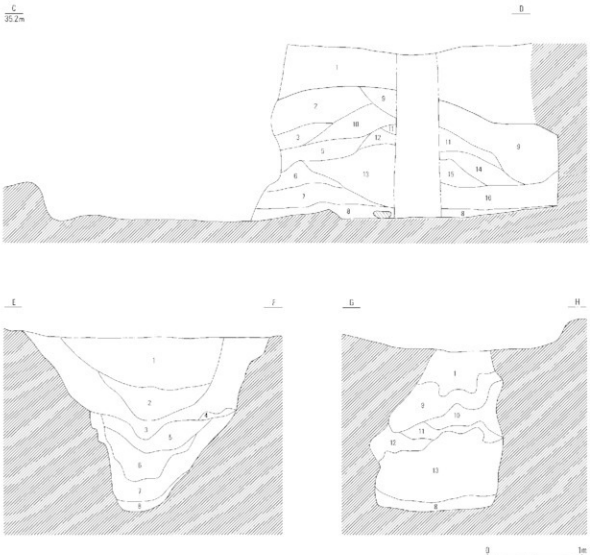
報告遺構名	調査時遺構名	玄室規模（m）			玄室平面形態	墓道規模（m）	
		長さ	幅	高さ		長さ	幅
１号墓	ＳＸ１	2.6	1.6	1.0	長方形	6.3	0.8
２号墓	ＳＸ11	2.6	1.2	0.6	長方形	5.5	0.6
３号墓	ＳＸ７	3.0	1.6	1.0	長方形	8.7	0.5
４号墓	ＳＸ８	－	1.8	－	不明	－	－
５号墓	ＳＸ９	－	1.5	－	不明	－	－
６号墓	ＳＸ10	－	1.4	－	不明	－	－

第１表　横穴墓一覧表



第13図 横穴１号墓（SX１）展開図（１：60）

第14図 横穴１号墓道構平面図（１：40）及び墓道部遺物出土状況図（１：20）



1. 10YR6/6　明黄褐色土(整地土)
2. 10YR4/6　褐色土. 礫(φ2～6cm 程)少量含む.
しまり有. 粘性弱.(①が流入)
3. 10YR6/4　にぶい黄褐色土. 地山ブロック・炭化材を僅かに含む.
しまり有. 粘性弱.(①が流入)
4. 7.5YR5/4　にぶい褐色土. 焼土粒子・炭化材まばらに含む.
しまり有. 粘性弱.
5. 2.5Y6/4　にぶい黄色土. 地山粒子・炭化材僅かに含む.
しまり有. 粘性弱.
6. 2.5Y7/6　明黄褐色土. 地山粒子少量. 炭化材僅かに含む.
しまり有. 粘性弱.
7. 2.5Y7/3　淡黄色土. 地山粒子まばらに含む. しまり有. 粘性弱.
8. 2.5Y8/3　淡黄色土. 地山粒子・地山ブロック多量に含む. しまり有. 粘性弱.
9. にぶい黄色土(2.5Y6/4)と淡黄色土(2.5Y7/4)の互層.(崩落土)
10. 2.5Y4/6　オリーブ褐色土. 地山砂・小礫(φ0.5cm 以下の円礫)
花崗岩粒など僅かに含む. しまり有. 粘性弱.(崩落土)
11. 2.5Y6/4　にぶい黄色土。やや褐色砂質土層じる.(崩落土)
12. 2.5Y6/4　にぶい黄色土. 地山ブロックまばらに含む.(崩落土)
13. 灰黄色砂(2.5Y7/2)とにぶい黄(2.5Y6/4)とオリーブ黄(5Y6/4)の互層.
地山砂. 密で大きなブロック状になっている.
しまり強. 粘性なし.(崩落土)
14. 5Y8/4　オリーブ黄色土. 細かな砂質土. しまり・粘性なし.(崩落土)
15. 2.5Y6/4　にぶい黄色土. 酸化鉄層が認じる.(崩落土)
16. 5Y6/4～6/3　オリーブ黄色土. 14よりやや細い砂質土.(崩落土)

第15図 横穴１号墓土層断面図（１：40）

見られるが、5・6は在地産であろう。7は長頸瓶の口縁部で猿投産のH50期のものであろう。8は甕の口縁部で波状文が施される。

土師器（9～11）

9は高杯、10は土製の管玉、11は甕である。体部内面はハケ調整されているが、外面は不明である。

礫（12）

12は玄室内に置かれた線刻礫である。石材はホルンフェルスで、縦横にランダムに平行線が線刻されている。

2　2号墓（SX11）

遺構（第17～22図）

玄室：長さ　2.6m　**幅**　1.2m　**高さ**　0.6m

床面積　2.6㎡

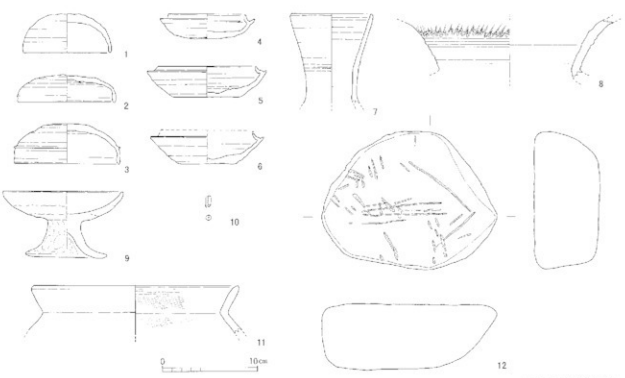
平面形態　方形？

天井形態　不明

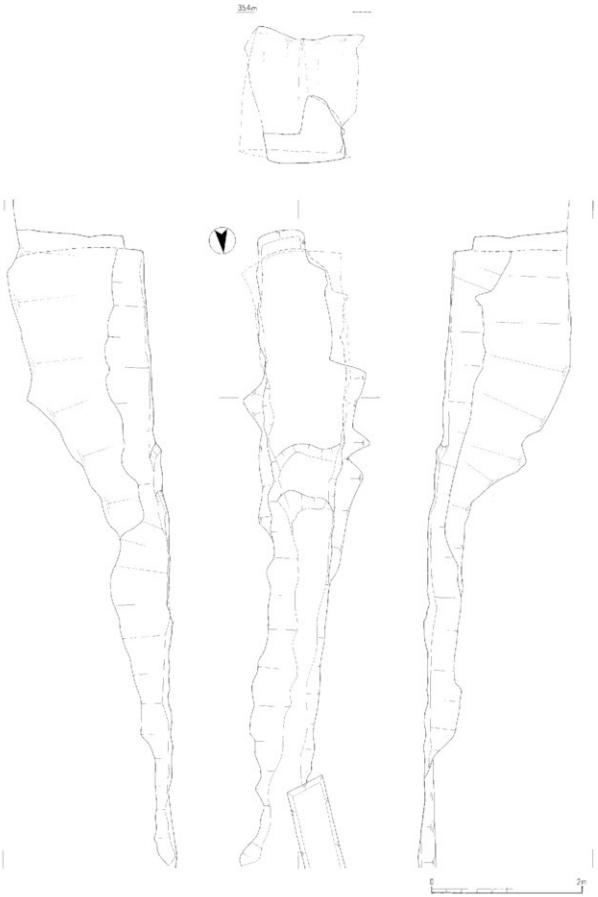
墓道：長さ　5.5m　**幅**　0.6m

1号墓の東隣で検出した。1号墓同様、玄室は天井部の崩落と流入土によって埋没していた。埋土の観察から流入・堆積によって、ある程度玄室が埋没した後、小規模な天井部の崩落があったことが確認できた。玄室の平面形状は奥壁部が長い台形に近く、奥壁は垂直に立ち上がっている。玄室の主軸はほぼ座標北を測る。玄室床面は墓道よりも約20cm高くなっており、標高は約33.5mで1～3号墓のうち最も高い。階段状の段差が見られるが閉塞施設はみられない。玄室内には、中央及び奥壁よりに礫が集中しており、棺台とされたと考えられる。中央部東寄りから耳環が出土し、その下から人骨片が検出された。松下氏に鑑定していただいたが、遺存状況が悪く詳細は分からなかった。玄室入口付近で須恵器の平瓶（22）が正立状態、高杯（20）が横転状態で出土している。また平瓶の中から管玉（25）が出土した。

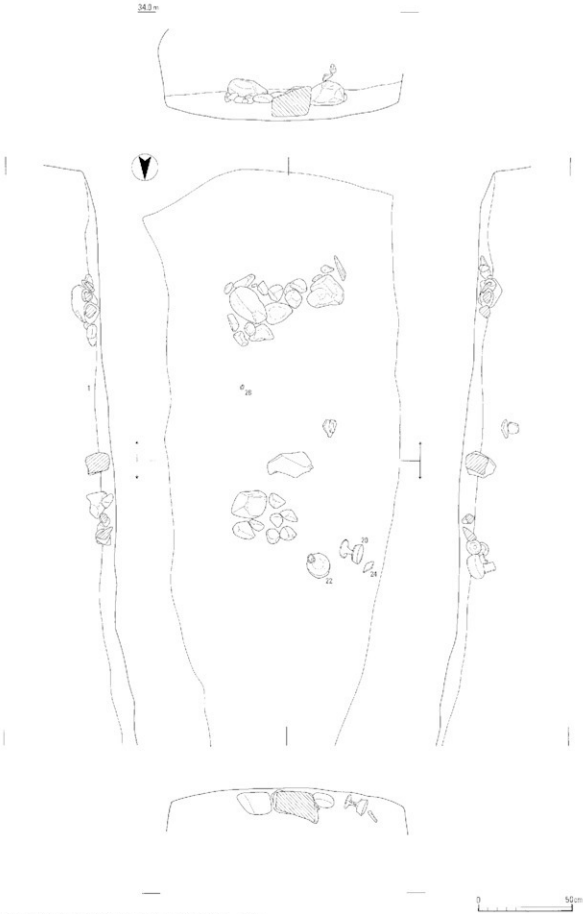
墓道は玄室の主軸に対しやや東に曲がっている。墓道埋土はだいたい3層に分層でき、玄室入口から1.8m東の地点でその第1層から土器が集中して出土している。



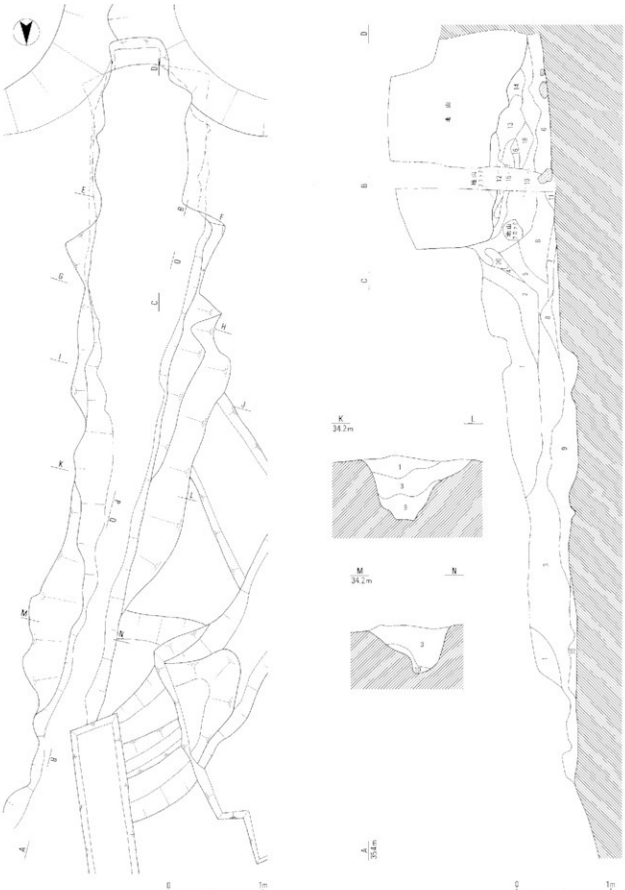
第16図 横穴1号墓出土遺物実測図（1：4）



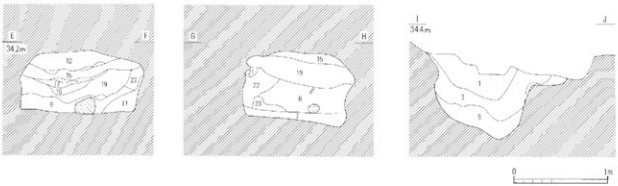
第17図 横穴２号墓（SX11）展開図（１：50）



第18図 横穴２号墓玄室内遺物出土状況図（１：20）



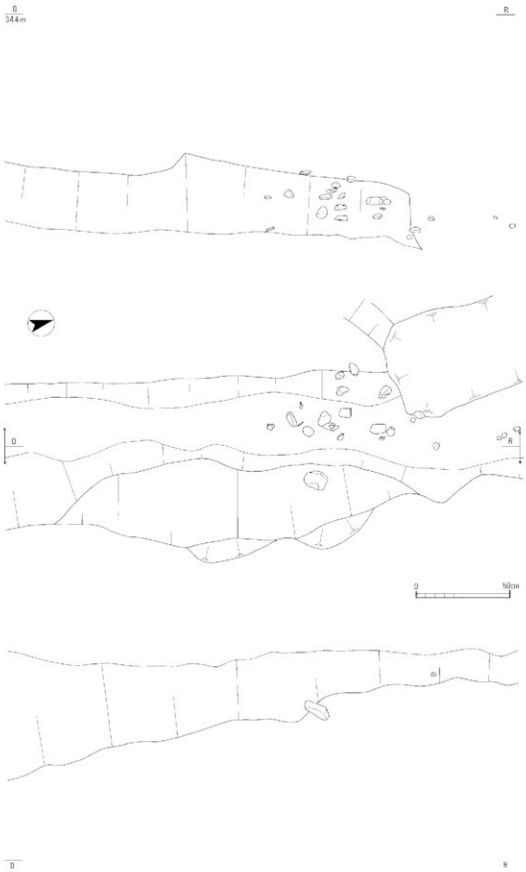
第19図 横穴２号墓遺構平面図及び土層断面図（１：40）



1.	10YR7/4	にぶい黄橙色砂質土。炭化材・焼土粒子を僅かに含む。
2.	10YR5/4	にぶい黄褐色砂質土。
3.	10YR7/4	にぶい黄橙色砂質土。水成岩の礫(φ2～4cm 程)少量含む。しまり有、粘性弱。
4.	10YR5/8	黄褐色土。やや砂質土。
5.	10YR5/4	にぶい黄褐色砂質土。にぶい黄橙色砂(10YR7/4)と混じった様子。
6.	2.5Y7/4	浅黄色砂質土。5より粒子細かい。
7.	2.5Y7/4	浅黄色砂。しまりなし。
8.	2.5Y6/4	にぶい黄色砂質土。砂粒細かく、しまり有。
9.	2.5Y6/4	にぶい黄色砂質土。地山灰白色砂を含む。しまり有、粘性弱。
10.	10YR6/6	明黄褐色砂質土。地山赤褐色砂を含む。しまり有、粘性弱。
11.	2.5Y7/4	浅黄色土。地山粒子密。しまり弱。粘性弱。
12.	10YR6/6	明黄褐色砂質土。しまり弱。粘性なし。(流入土。)
13.	2.5YR8/4	淡黄色土。しまり弱、粘性なし。(崩落土。)
14.	2.5YR7/4	淡黄色土。しまり弱、粘性なし。(崩落土。)
15.	10YR7/4	にぶい黄橙色土。きめの細かい地山砂粒を含む。しまり弱。粘性なし。
16.	10YR4/6	褐色土主体。しまり弱。粘性弱。(流入土。)
17.	10YR6/4	にぶい黄橙色土。地山の小ﾌﾞﾛｯｸ多量含む。しまり弱、粘性弱。 (崩落土と流入土の混じり。)
18.	10YR6/5	にぶい黄橙色土。17より小さい径の地山の小ﾌﾞﾛｯｸ多量含む。しまり弱、粘性弱。
19	10YR6/4	にぶい黄橙色砂質土。粒子は細かい。(崩落土。)
20.	2.5Y7/6	明黄褐色砂質土。(崩落土。)
21.	10YR6/4	にぶい黄橙色土。地山砂を微量に含む。しまり弱、粘性弱。
22.	10YR6/3	にぶい黄橙色土。地山砂を少量含む。しまり弱、粘性弱。
23.	10YR7/3	にぶい黄橙色土。しまり弱、粘性弱。

第20図 横穴２号墓土層断面図（１：40）

第21図 横穴２号墓墓道部遺物出土状況図（１：20）



第22図 横穴２号墓墓道部遺物出土状況図（１：20）

遺物（13～29、第23図）

須恵器（13～24）

13～15は蓋である。いずれも在地産のものとみられる。16～18は杯身である。19～21は高杯である。22は平瓶である。23は把手、24は瓶の底であろう。

土師器（25～27）

26は瓶か。体部内面はケズリ調整されている。27は鍋である。25は土製の管玉である。

金属製品（28・29）

銅製品の耳環である。いずれも金が表面にみられるため、金銅製品であることは間違いないが、蛍光X線分析結果から銀が検出されており、そこから推察される製作方法は銅芯に銀の板を巻き、水銀を用いて金を施したと考えられている（第Ⅶ章参照）。ふたつの出土位置は28が玄室内、29が墓道部と大きく違うが、これは玄室内が荒らされたなど、何らかの埋土の移動に伴って埋葬時の状態が保たれていなかったためで、本来は対の装身具として存在していたものであろう。

3　3号墓（ＳＸ７）

遺構（第24～29図）

玄室：長さ　3.0m　幅　1.6m　　高さ　1.0m

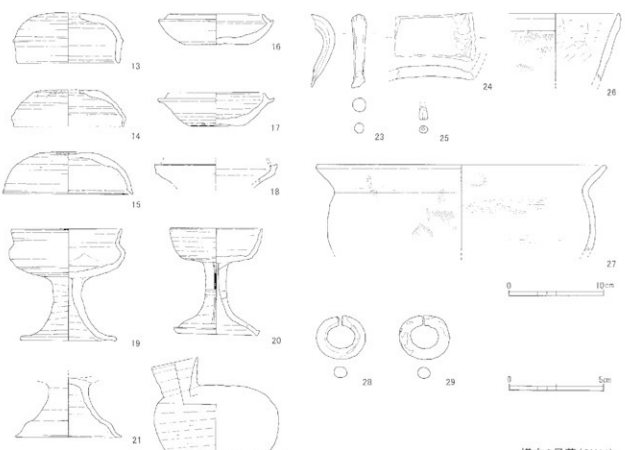
床面積　3.8㎡

平面形態　台形？

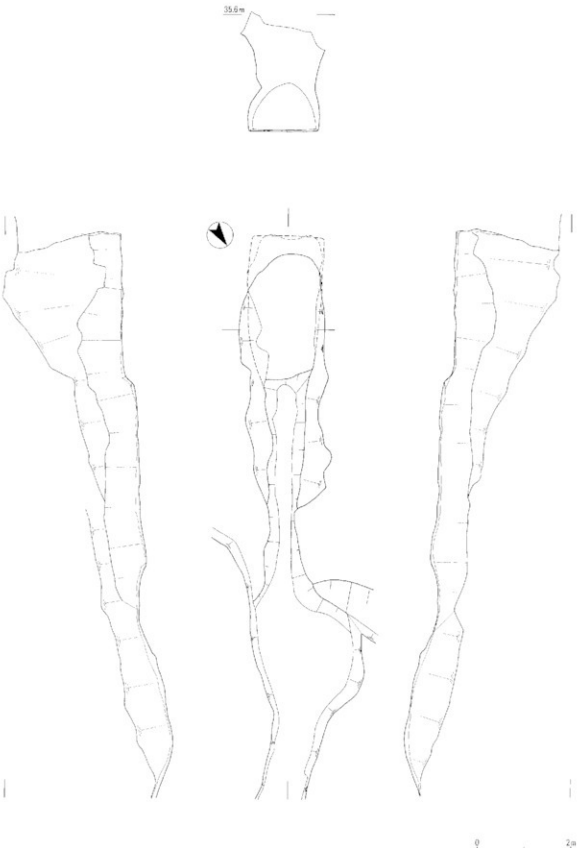
天井形態　アーチ形？

墓道：長さ　8.7m　幅　0.5m

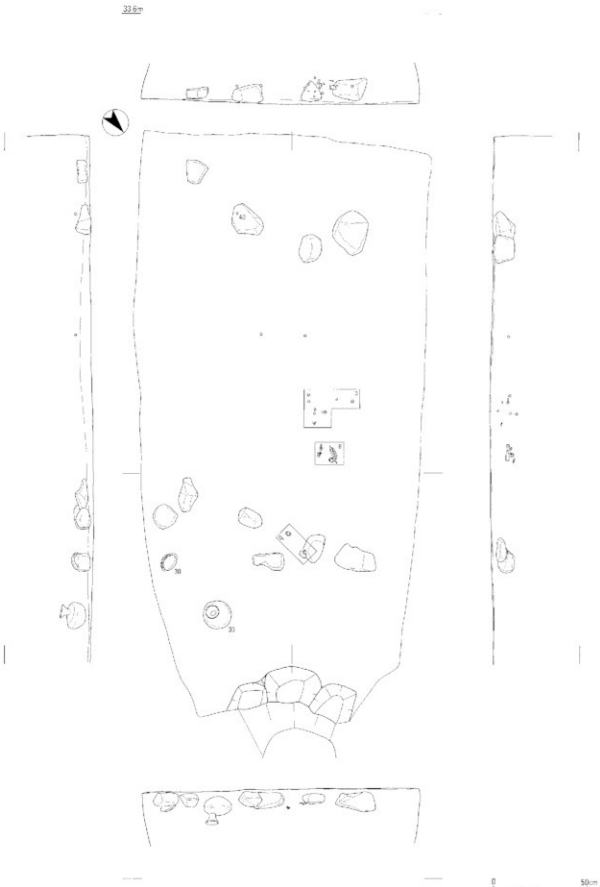
2号墓の約3m東で検出した。1・2号墓同様、玄室は崩落土及び流入土によって埋没していた。玄室の平面形態は奥壁側がやや長い台形である。奥壁はほぼ垂直に立ちあがり、側壁はアーチを描いて立ち上がっていることから天井形態はアーチ形を呈すると思われる。玄室床面は墓道より約20cm高くなっており、標高33.1mを測る。玄室入口には段差がみられ、何らかの閉塞施設があった可能性がある。墓



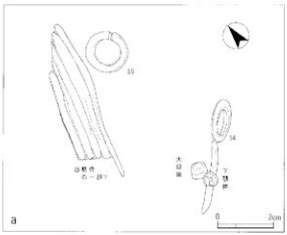
第23図 横穴２号墓出土遺物実測図（13～27は１：４、28･29は１：２）

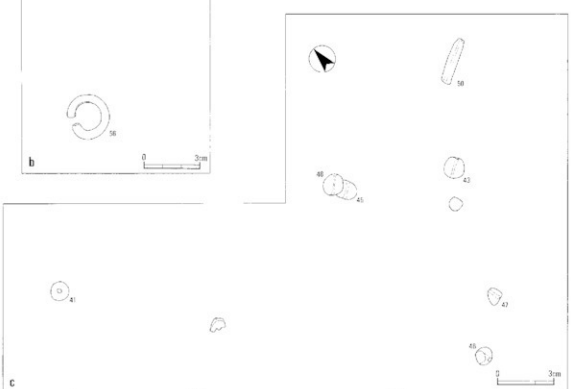


第24図 横穴３号墓（SX７）展開図（１：80）

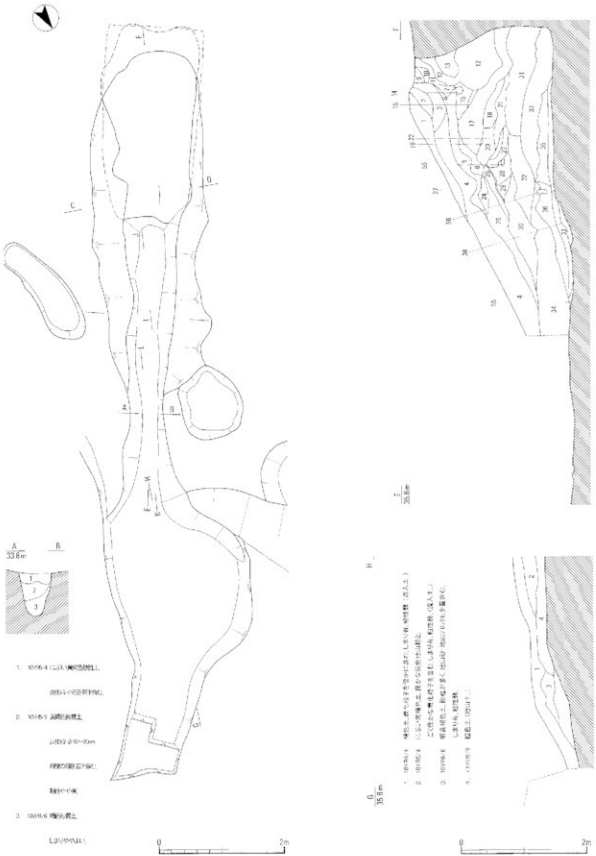


第25図 横穴３号墓玄室内遺物出土状況図（１：20）





第26図 横穴３号墓玄室内遺物出土状況図（１：２）

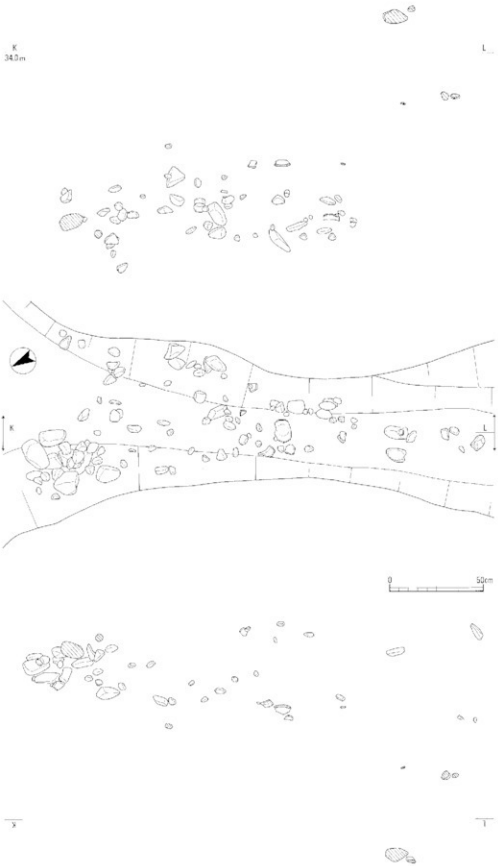


第27図 横穴３号墓遺構平面図及び土層断面図（１：60）

1　10YR5/4~5/6 にぶい黄橙～黄橙色土 しまりあ, 粘性有（新表土）
2　10YR5/8 黄褐色土 しまりあ, 粘性有.
3　10YR6/8 明黄褐色土 白色粒（φ1～2mm）を含む, 粘性有.
4　10YR5/4 にぶい黄褐色土 2cm～10cmの程度礫類を僅かに含む, しまりあ, 粘性弱.
5　10YR6/4 明色土 しまりあ, 粘性弱.
6　10YR6/6 明黄褐色土 φ1～2cm の砂礫粒子10%を含む.
7　2.5Y7/4 浅黄色土
8　10YR5/4 にぶい黄橙色土 しまりあ, 粘性やや有.
9　10YR6/6 明黄褐色砂質土 灰黄色地山粒子10%前後含む, しまりあ, 粘性弱.
10　2.5Y7/4 浅黄色土 黄褐色地山粒子20%以内含む, しまりあ, 粘性弱.
11　10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土 灰黄色地山ブロック少量含む, しまりあ, 粘性弱.
12　10YR5/4 にぶい黄褐色土 地山粒子10%ほど2～3cm程度ほどに含む, しまりあ, 粘性弱.
13　2.5Y8/4 淡黄色砂 地山粒子10%が φ1～5cm を多量含む, しまりあ, 粘性弱.
14　10YR4/6 褐色土 10%ほど, しまりあ, 粘性弱.
15　10YR7/4 にぶい黄橙色砂質土 地山粒子30%少量含む, しまりあ, 粘性弱.
16　2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土, しまりあ, 粘性弱.
17　10YR5/4 にぶい黄橙色砂 褐色土少量含む, しまりあ, 粘性弱.
18　2.5Y7/2 淡黄色砂, しまりやや弱, 粘性弱.
19　2.5Y6/2 にぶい黄色砂, 17層礫粒が, 褐色土を含む量は少ない, しまりあ, 粘性無.
20　10YR6/4 にぶい黄橙色砂, 17層礫粒が, 褐色土を含む量が多い, しまりあ弱, 粘性弱.
21　2.5Y7/4 浅黄色砂, 褐色土少量含む, しまりあ, 粘性弱.
22　10YR4/3 にぶい黄褐色土, 地山粒子多量が混ざりい, しまりあ, 粘性有.
23　10YR5/4 にぶい黄褐色土, 22層と地山砂の混合土, しまりあ, 粘性弱.
24　10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土, 僅かに灰色砂が入る, しまりやや弱, 粘性弱.
25　10YR5/8 黄褐色土, 僅かに灰色砂が入る, しまりやや弱, 粘性弱.
26　10YR6/8 明黄褐色砂土, 灰色粒がほどに含む, しまりやや弱, 粘性弱.
27　7.5YR5/8 褐色土.
28　10YR5/8 黄褐色土, 22層と地山砂の混合土, 23層より22層を含む量が多い, しまりやや弱, 粘性弱.
29　10YR7/6 明黄褐色砂質土, 灰褐・赤の粒ブロックを含む.
30　10YR5/8 黄褐色土, 22層と地山砂の混合土, 23層より22層を含む量が多い, しまりやや弱, 粘性弱.
31　2.5Y7/4 浅黄色砂.
32　10YR5/4 にぶい黄褐色土, 黄褐色砂質土に灰色砂粒子やや大が入る, しまり, 粘性弱. 一部砂がにより変色したものを含む.
33　7.5YR5/4 にぶい黄褐色砂質土, 地山ブロック, 粒子白色砂をまばらに含む, しまりあ, 粘性弱.
34　10YR6/8 明黄褐色砂, 黄褐色砂質土, 灰色砂, 赤みがかった砂の混合, しまりあ, 粘性弱.
35　10YR6/6 明黄褐色砂質土, しまりあ, 粘性弱.
36　10YR7/4 にぶい黄橙色砂質土, 地山ブロック, 粒子白色砂をまばらに含む, しまりあ, 粘性弱.（柵等土.）
37　2.5Y8/2 にぶい黄色土, 地山ブロック, 粒子白色地山砂を含む, しまりあ, 粘性無.
38　2.5Y7/6 明黄褐色土, 地山ブロック, 粒子白色地山砂を多く含む, しまりあ, 粘性有. 一部, 灰黄色土ブロックを含む.
39　10YR7/6 明黄褐色土, 地山土体.
40　10YR6/4 にぶい黄褐色土, 黄褐色の地山土体.（流入土.）
41　10YR6/6 明黄褐色土, しまりやや弱, 粘性ほどんど無.（流入土.）
42　10YR5/6 黄褐色土, 地山土体.（流入土.）粘性ほどんど無, しまりあ.
43　7.5YR5/8 褐色土.（砂流土.）
44　10YR6/4 淡黄褐色ブロック.
45　10YR6/8 明黄褐色砂質土, 灰色砂がまばらに含む, しまりやや弱, 粘性弱.
46　10YR6/4 にぶい黄橙色土, 黄褐色土の地山土体.（流入土.）
47　10YR5/4 にぶい黄橙色土, 黄褐色土の地山土体.（流入土.）
48　10YR6/8 黄褐色土, 地山ブロック白色砂を含む.

49　10YR7/3 にぶい黄橙色土, 地山ブロック, 白色土多量含む, しまりあ, 粘性弱.
50　10YR7/6 明黄褐色土, 地山ブロックを含む, 灰色砂の混合が大きい.
51　10YR5/6 明黄褐色土, 地山ブロックを含む, 灰色砂の混合が大きい.
52　10YR6/6 明黄褐色土, 地山ブロックを含む, 灰色砂の混合が大きい.
53　10YR4/6 褐色土, しまりやや弱, 粘性弱.
54　10YR7/4 にぶい黄橙色土, 黄褐色砂粒子土, 灰色砂, 赤みがかった砂, 黄山砂の混合土, しまりあ, 粘性弱.

第28図 横穴３号墓土層断面図（１：60）及び墓道部遺物出土状況図（１：20）



第29図 横穴３号墓墓道部遺物出土状況図（１：20）

道と玄室の境ははっきりとはわからないが、玄室より幅が狭い墓道が玄室の中央からのびていることから両袖を意識しているとみられる。

玄室内には奥壁寄りと入口付近に30～40㎝大の石がみられ、棺台であったと考えられる。玄室入口東側で須恵器平瓶（33）と杯身（30）が正立状態で出土した。また、玄室中央西寄りに人骨片・歯及び耳環１組（54・55）と滑石製の丸玉12個（40～49）が（ａブロック）、入口側の石付近から人骨片及び耳環１組（56・57）（ｂブロック）が出土した。松下氏による鑑定の結果、ａブロックのものは下顎骨片・四肢骨片及び歯２個であり、歯は幼児と成人２個体の可能性が強いことが分かった。頭蓋骨片と四肢骨片がすぐ近くで出土していることから、埋葬時の位置は保っていないと考えられる。また、ｂブロックのものは頭蓋の一部と考えられる骨片と判明した。

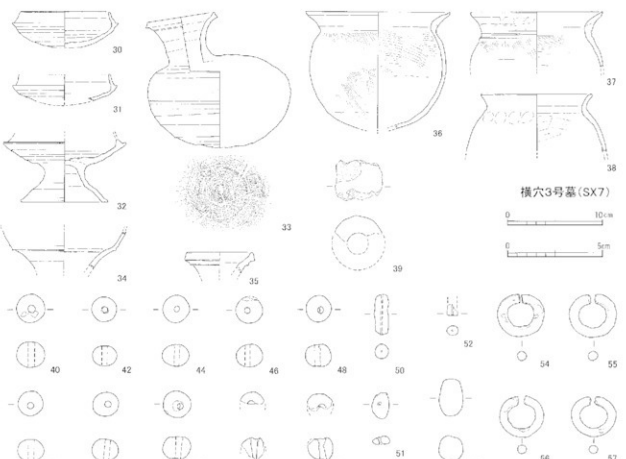
墓道は玄室の長軸と軸を合わせ玄室中央に付設されている。１・２号墓のように曲がっていることはなく直線状である。墓道部からも土器が出土しているが、いずれも埋土中からの出土である。破片が後述するテラス部分から出土した破片と接合しており、土器を破砕した後散布するといった祭祀行為が行われた可能性がある。

遺物（30～57、第30図）

須恵器（30～35）

30・31は杯身である。30は猿投産で、外面体部に赤彩が施される。顔料部分の蛍光Ｘ線で分析した結果、水銀のピークがみられないことから、ベンガラを使用したのではないかと考えられる。32は高杯である。やや古い様相を呈する。33は平瓶で底部外面にヘラ記号がみられる。猿投産でＨ50期に相当しよう。34は瓶、35は細頸瓶の口縁部である。34は在地産、35は猿投産でＨ50期に相当しよう。

土師器（36～39・50～53）



第30図 横穴３号墓出土遺物実測図（30～39は１：４、40～57は１：２）

36～38は甕である。いずれも径12～15cm程度で、小形品である。36・37は内面ハケ調整だが、38は内面ケズリ調整である。39は鞴の羽口と思われる。50～53は土師質の玉類である。50・52は管玉であろう。52は小片だが形成がしっかりとしている。51は不整形の中央に孔があり、玉としたが、よくわからない。53には孔はみられないが、人工物であると考えた。用途などは不明である。

石製品（40～49）

40～49は滑石製の丸玉である。平面は球形を呈するが、縦断面は楕円形を呈する。白色のものがほとんどだが、中には青灰色を呈するものがある。非常にもろく、風化が進んでいる。48や49を観察する限り、穴は両側から穿孔されているようである。

金属製品（54～57）

いずれも銅製品の耳環である。分析の結果から銅芯に水銀を用いて金を施していることは間違いないが、どのような方法で施したかは不明である（第Ⅷ章参照）。法量などから54と55、56と57が対と考えられ、それは出土位置とも矛盾しない。

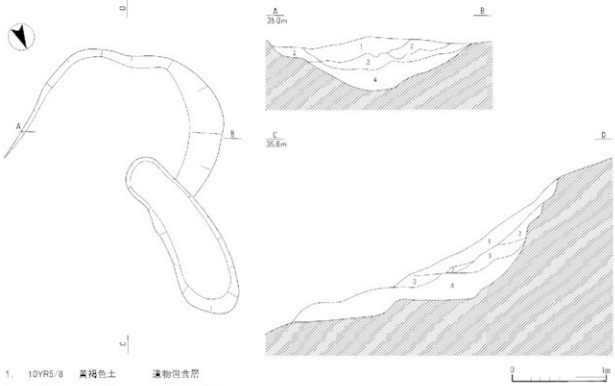
写真５　丸玉の穿孔方向

4　他の横穴墓

1　４号墓（ＳＸ８、第31図）

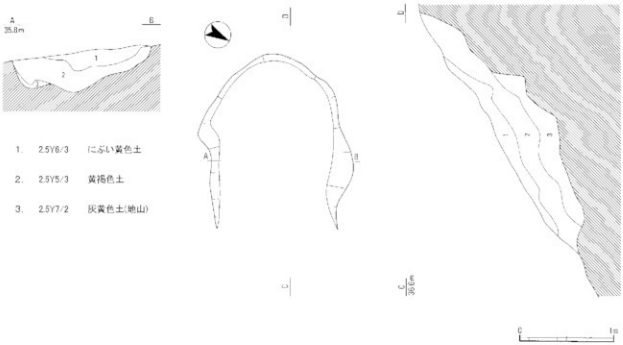
規模：幅　1.8m

３号墓の南で確認した土坑である。尾根鞍に位置し、全容は不明である。規模などから横穴墓の玄室部分の可能性があると考え、４号墓とした。埋土は３層程度にわけることができ、最下層が崩落に伴うものか。床面に相当する部分は一応平坦で、標高は約33.8mを測り、１～３号墓よりは高い。図示する

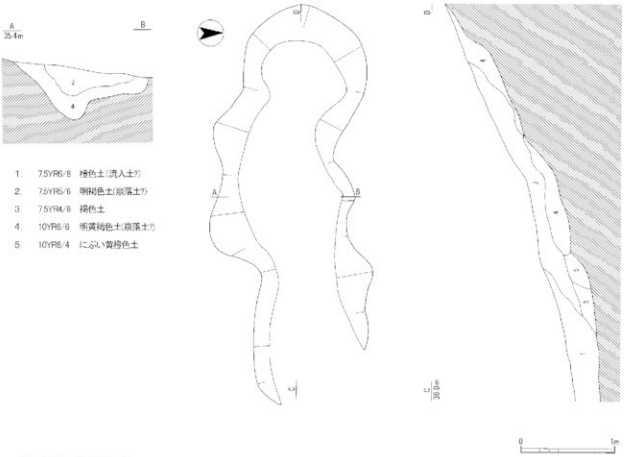


1.　10YR5/8　黄褐色土　遺物包含層
2.　10YR5/6　黄褐色土　1に地山土を含む
3.　10YR6/6　明黄褐色土　2より地山砂粒少ない
4.　2.5Y6/3　にぶい黄色土　砂質土。(崩落土。)

第31図 横穴４号墓（SX８）遺構平面図及び土層断面図（１：40）



横穴5号墓（ＳＸ９）



横穴6号墓（ＳＸ１０）

第32図 横穴５号墓（SX９）及び横穴６号墓（SX10）遺構平面図、土層断面図（１：40）

ような遺物は出土しなかった。

2　5号墓（ＳＸ９、第32図）

規模：幅　1.5m

4号墓から6m南で確認した土坑である。尾根裾から頂部へ向かって掘りこまれているが、流失のためか全容は不明である。規模などから、横穴墓の可能性があると考え、5号墓とした。埋土は3層に分けることができ、最下層が崩落土か。床面に相当する部分は標高35m付近だが、緩やかに傾斜している。図示できるような遺物は出土していない。

3　6号墓（ＳＸ10、第32図）

規模：幅　1.4m

5号墓から5m更に南で確認した土坑である。尾根裾から頂部へ向かって掘りこまれていることや、規模から横穴墓の可能性があると考え、6号墓とした。流失や調査区制限から全容は不明である。埋土は主に4層に分けることができ、第4層は崩落土か。床面は緩やかに傾斜しており、最も低い部分で標高34.4mを測る。図示できるような遺物は出土しなかった。

5　土器集中部

3号墓と2号墓の間、テラス状に平坦な部分で、土師器が集中して出土し、また焼土の塊が数ヶ所確認できた。テラス部分の標高は約33.6mを測り、遺物は10～20cm程度浮いた位置で出土している。焼土の塊は2～5cm程の厚さがあった。出土した遺物はほとんどが土師器の甕で、煤が付着しており使用痕跡がある。

遺物（58～67、第35図）

須恵器（58～61）

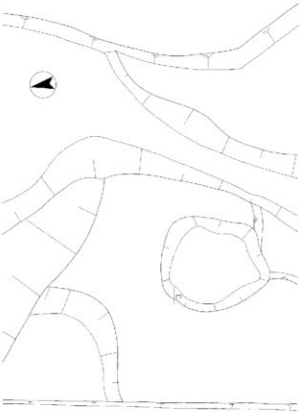
58は蓋である。猿投産でH44期に相当しよう。59は横瓶の口縁部か。60は提瓶、61は横瓶である。60・61はいずれも猿投産と思われる。

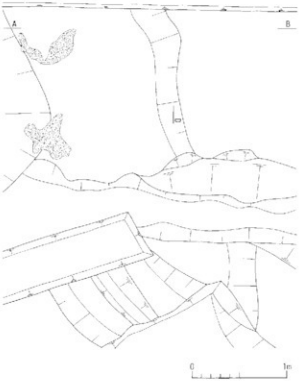
土師器（62～66）

63～66は甕である。66は把手を有する。いずれも内外面はハケ調整されている。62は甑か？

軽石（67）

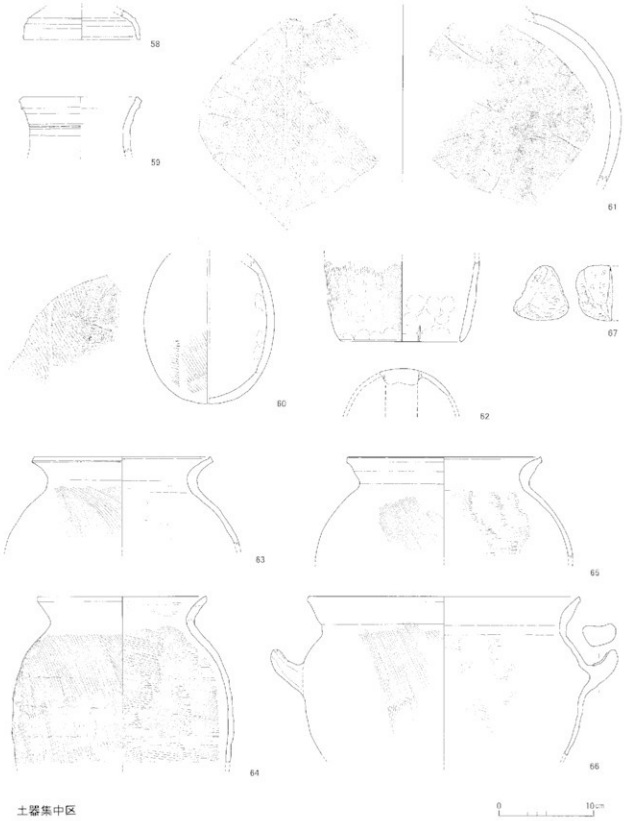
軽石である。





第33図 土器集中部遺構平面図（1：40）

第34図 土器集中部遺物出土状況図（1：20）



第35図 土器集中部出土遺物実測図（1：4）

Ⅴ　広永１号墳

遺構（第36～39図）

墳丘　形状：円墳？

　　規模：径10m

玄室　規模：長軸3.6m以上×短軸2.8m

南側の尾根頂部に位置する。墳丘は削平を受けているためか盛土などは不明である。周溝の一部とみられる溝と墳丘側の溝の肩を確認した。周溝は攪乱を受けており明らかに分かる部分は少ない。周溝の幅ははっきりしたところで、2.1～2.4m、深さは約30cmを測る。周溝内からは特に遺物は出土していない。古墳は円墳と考えられるが、周溝の東辺が直線的であることから、方墳の可能性もある。円墳の場合は径10m程度、方墳の場合は１辺８m程度になると考えられる。墳頂部からも特筆すべき土器は出土しなかった。

主体部については掘形を確認したため、調査区を西に幅１.0m、長さ７.0mに渡って拡張した。結果、幅2.6m、長さ4.0m以上の主体部掘形を検出した。主体部の主軸はN18°Eを示し、南南西に開口する横穴式石室とみられる。袖部分は調査区外のため不明である。

主体部掘形を掘り下げた結果、奥壁とみられる石材を確認したが、側壁部分はすでに抜き取られており、石室内は相当攪乱を受けていた。奥壁石材は東側が高さ１m・幅0.8m、西側が高さ0.8m・幅0.7mを測る。

石室床面は小石を多く含んでいるが、人頭大の礫が直線状に数個並ぶ他は、石はみられない。床面からは他に須恵器杯（69・70）、平瓶（71）、土師器高杯（72）が西寄りに、金銅装大刀（74）が東寄りに出土した。大刀は石室主軸に平行に、刃を内側にし、切先を入口側に向けて出土している。また、奥壁付近から鉄釘（73）が出土した。

遺物（68～74、第39図）

須恵器（68～71）

68は蓋、69・70は杯である。71は平瓶である。70は在地産だが、その他の物は猿投産とみられる。いずれも７世紀後半のものであろう。

土師器（72）

高杯である。風化・摩滅が激しく、残存状態はかなり悪い。

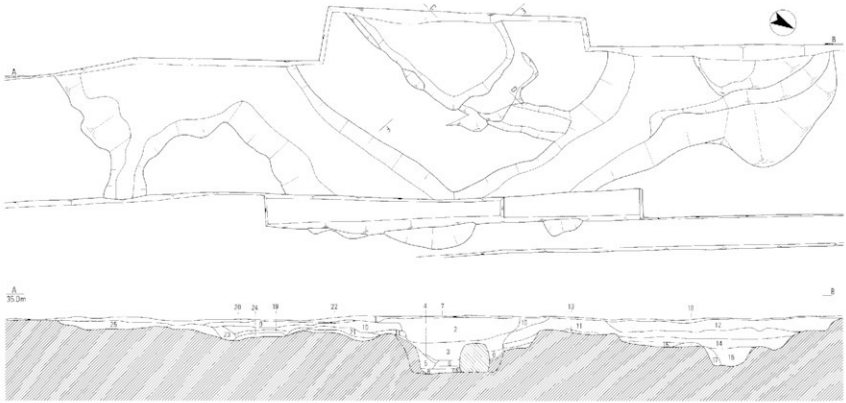
鉄製品（73・74）

73は釘である。角釘で、傘の部分は円形を呈する。特に木質などは付着していない。

74は大刀である。全体に鞘材が残り、またその表面には皮膜が見られた。材質分析の結果、鞘材はヒノキ、皮膜は漆であることが判明した。（第Ⅷ章参照）。

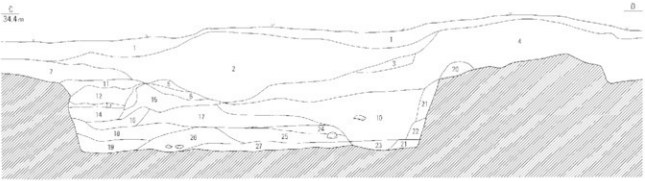
Ｘ線写真で判断する限り、背関は浅直角関、刃関はナデ角関で、関の位置は揃わない。茎には目釘が１本残存するが、把縁側にもう一つ目釘穴がＸ線写真で確認できた。把口金具、鞘口金具、佩用金具は金銅装である。鞘口金具は木芯の上に銅をかぶせ、鍍金されていると思われる。佩用金具は２箇所みられる。第１足金物が鞘口金具に付帯し、そこから約12cm切先側に第２金物が位置する。佩用金具部分は中空のようで、円形を呈する。

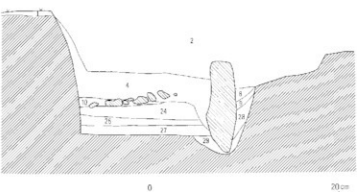
把頭部分は出土しておらず、形式は不明である。



1．7.5YR4/4　褐色土.（腐食土.）
2．7.5YR4/6　褐色土．粘質高く.細かい.
3．10YR5/4　にぶい黄褐色土．
　ごく少量炭化物を含む.しまりなし.
4．10YR5/6　黄褐色土.（撹乱埋土.）
5．10YR5/8　黄褐色砂.（撹乱埋土.）
6．7.5YR5/6　明褐色土.砂利小石を含む.
　（玄室堆積土.）
7．7.5YR5/6　明褐色土.6よりやや暗く褐色に近い.
8．10YR6/6　明黄褐色砂質土.
　床面の張り直しとみられる.
9．7.5YR5/8　明褐色土.
10．10YR4/6　褐色土.
11．10YR5/8　黄褐色土.
12．7.5YR5/6　明褐色土.
13．2.5YR7/3　にぶい黄
　～6/3　～浅黄色土.
14．10YR5/6　黄褐色土.
15．10YR5/6　（周溝埋土と考えられる）
　砂礫程度の細かな粒を含む.
　14よりやや濃い.
16．10YR5/8　黄褐色土.
17．10YR6/6　明黄褐色土.18の崩れた堆積物.
18．2.5Y7/3　にぶい黄～浅黄の地山と.
　又は6/3　5YR6/8 橙の酸化層の混合層.
19．7.5YR7/8　黄橙色土砂.
20．7.5YR7/8　黄橙色土砂.礫を含む.
21．7.5YR4/6　褐色土.
22．10YR5/6　黄褐色土.溝丘
23．10YR4/6　褐色土.
24．7.5YR6/8　橙色硬層.（礫は5mm～数cm）
25．7.5YR5/6　明褐色土.遺構埋土の可能性大.
　周溝を掘った際に周辺に落ったものか.

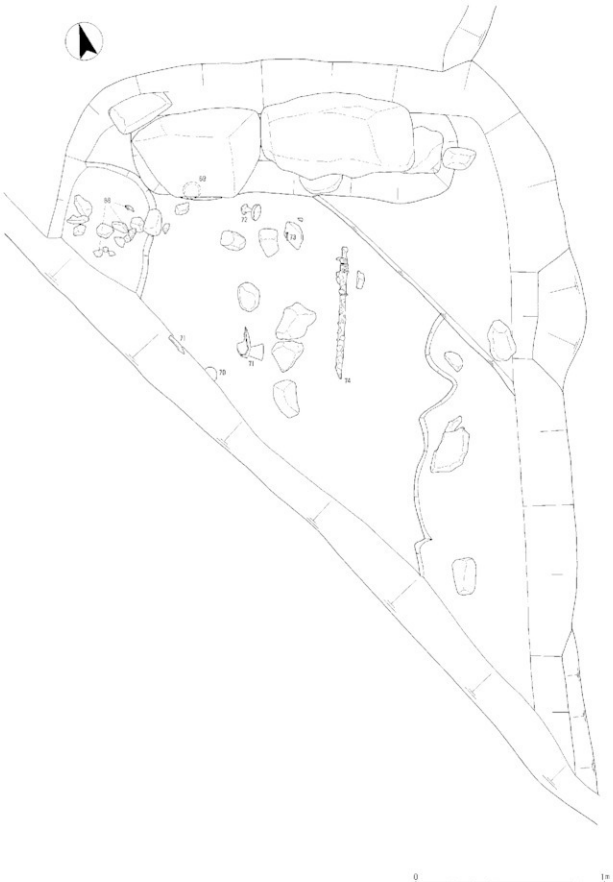
第36図 広永1号墳（SX13）遺構平面図及び土層断面図（1：100）



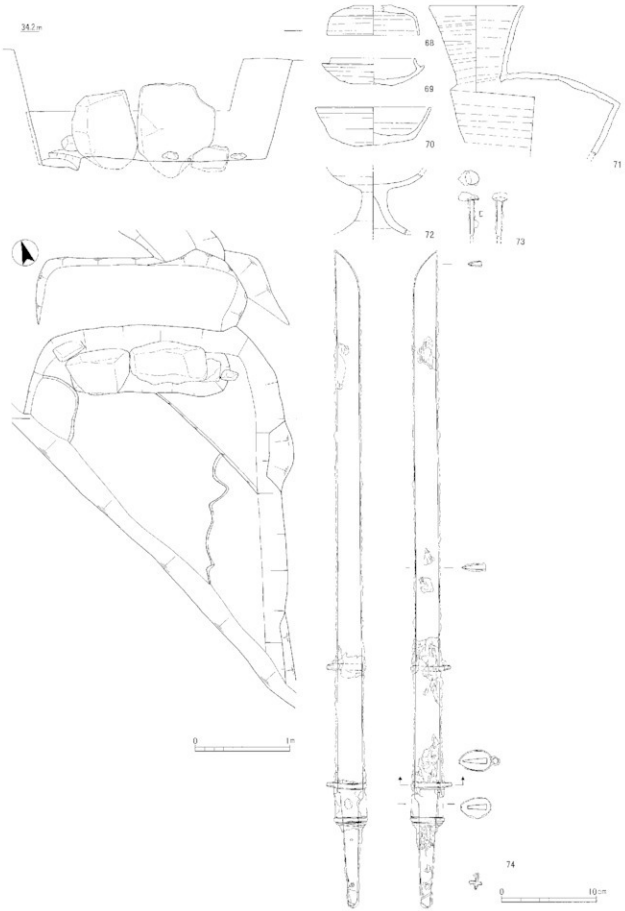


1.　7.5YR4/4　褐色土。(腐食土。)
2.　7.5YR4/6　褐色土。粘質高く、細かい。(後世の流入土。)
3.　10YR4/6　褐色土。粘性やや有。小石を多く含む。(盗掘後の流入土。)土砂。
4.　10YR4/6　褐色土。粘性やや有。小石(2～5mm)多い。(盗掘後の流入土。)
5.　7.5YR4/4　褐色土。6よりやや暗い。
6.　7.5YR4/4　褐色土。
7.　7.5YR4/4　褐色土。粘性高く、よくしまっている。
8.　7.5YR4/6　褐色土。
9.　10YR4/6　褐色土。
10.　10YR4/4　褐色土。やや粘性をもつ。礫を多く含んでいる。(撹乱。)
11.　10YR5/6　黄褐色土。(石抜き取りの撹乱埋土。)
12.　10YR4/3　にぶい黄褐色土。(石抜き取りの撹乱埋土。)
13.　10YR5/6　黄褐色土。(石抜き取りの撹乱埋土。)
14.　10YR4/3　にぶい黄褐色土。(石抜き取りの撹乱埋土。)
15.　10YR4/4　褐色土。(腐食土。)
16.　10YR5/6　黄褐色土。(石抜き取りの撹乱埋土。)
17.　7.5YR5/6　明褐色土。(石抜き後の撹乱流入土。)
18.　10YR4/3　にぶい黄褐色土。(石抜き取りの撹乱埋土。)
19.　7.5YR5/6　明褐色土。小石が混じる。(巻込め。)
20.　7.5YR4/6　褐色土。粒子やや粗く、よくしまる。
21.　10YR5/6　黄褐色土。粒子はやや粗いが、粘性は高い。(裏込め。)
22.　7.5YR5/6　明褐色土。小石が混じる。(裏込め。)
23.　10YR5/6　黄褐色土。(裏込め。)
24.　7.5YR5/6　明褐色土。砂利、小石を含む。(玄室内埋積土。)
25.　7.5YR4/6　褐色土。(玄室埋土。)
26.　10YR4/6　褐色土。(玄室埋土。)
27.　7.5YR5/8　明褐色土。(玄室床、整地土。)
28.　10YR5/8　黄褐色土。5～10cmの礫が混じる。(裏込め。)
29.　10Y6/2　灰オリーブ色砂。粘質を帯びるが、シルトより粗い。27に近く、28が混じる。(裏込めの基礎?)

第37図 広永1号墳土層断面図（1：40）



第38図 広永１号墳玄室内遺物出土状況図（１：20）



第39図 広永１号墳奥壁展開図（１：40）及び出土遺物実測図（１：４）

Ⅵ　広永遺跡

1　遺構と遺構遺物

ＳＸ３（第40図）

形式：不明

周溝を含む外周規模：南北11m×東西７m以上

広永１号墳のすぐ東で確認した。北側と南側の周溝の一部と北東隅の周溝の内側部分を確認している。西側周溝は広永１号墳ＳＸ13の周溝で破壊されており不明である。残りのよい南側の周溝では幅約1.2m、北側の周溝では幅約1.7mで、北側周溝の断面形状はすりばち状である。北側周溝と南側周溝の距離と、等高線から推定した北東隅から、規模は11m×７m以上と推定される。陸橋の有無などは周溝自体が切れ切れにしか確認できなかったため、不明である。墳丘も削平を受けており、主体部も確認できなかった。北側周溝から広口壺（75）と壺（76）が出土した。

遺物（75・76、第42図）

75は土師器の広口壺である。口縁部は見つからなかったが、体部はほぼ全体が出土した。体部上半部には櫛描文と刺突文が交互に５重に施され、下半部には赤彩が施される。底部には焼成後穿孔が見られる。76は土師器の壺である。

ＳＤ18（第41図）

規模：**長さ**　1.8m以上　　**幅**　0.7m

深さ　24cm

広永１号墳ＳＸ13の主体部掘形と重複して確認した溝である。奥壁部分から北方向に延びる溝で主体部との新旧関係は調査地の所見ではＳＤ18の方が古い。断面形状は逆台形を呈す。埋土は黄褐色の砂質土である。溝の肩から須恵器蓋（77）・杯（78）が出土した。

遺物（77・78、第42図））

須恵器の蓋（77）と杯（78）である。いずれも猿投産とみられ、Ｈ50型式に相当しよう。

ＳＫ38

規模：**長さ**　1.6m以上　**幅**　1.4m

横穴１号墓ＳＸ１の西側で、１号墓と重複して確認した土坑である。検出段階での記録から１号墓よりは古いと考えられる。埋土には礫や焼土が混じっていた。

遺物（79、第42図）

土師器甕の口縁部である。口縁部は肥厚する。風化が激しく調整などは不明である。

2　包含層出土の遺物（80～92）

包含層出土としたものには、後述する広永城跡の整地土と判断した層から出土したものも含まれる。いずれも、横穴墓もしくは古墳に伴う時期の遺物であるため、ここで報告する。

須恵器（80～90）

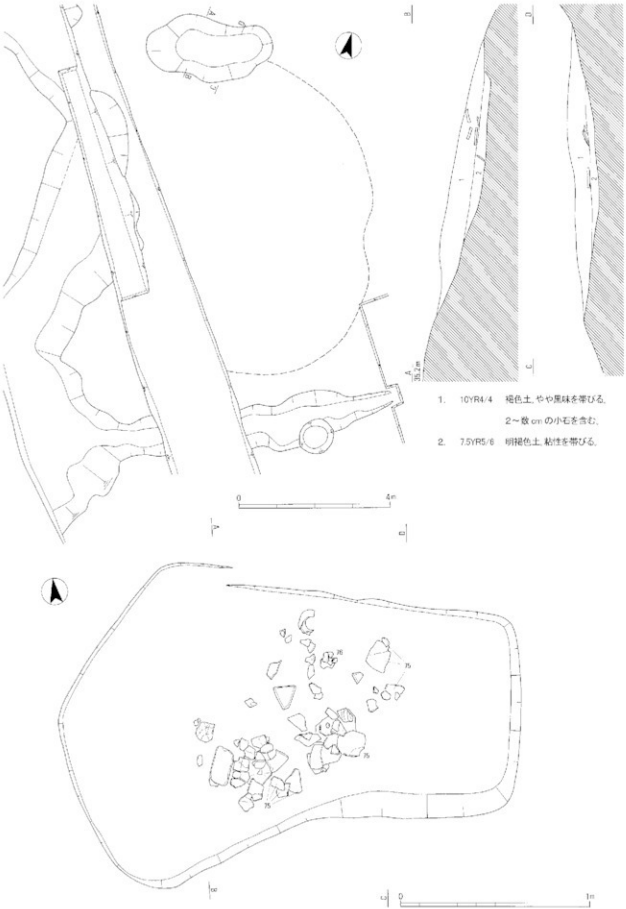
80・81は蓋であるが、80は杯の可能性も残る。81は外面にヘラ記号が施される。いずれも在地産で、７世紀前半のものであろう。82・83は杯である。猿投産で、Ｈ44期に相当しよう。法量や口縁部の形状がよく似ており、同一個体の可能性がある。

84～88は高杯である。84は脚杯短頸壺とも考えられ、類似の資料が鈴鹿市岸岡山古窯から出土している。85・86は在地産と考えられ、７世紀後半のものと考えられる。87・88は猿投産のもので、87がＩ17期、88がＨ50期に相当しよう。

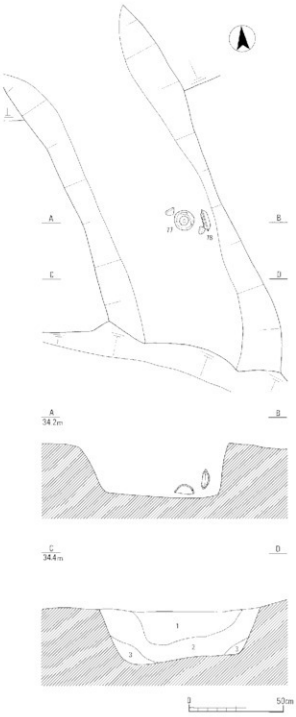
89は壺の底部である。猿投産のものか。底部外面に「△」状のヘラ記号が施されている。90は壺の口縁である。

土師器（91・92）

土師器甕の口縁である。　　（角正）

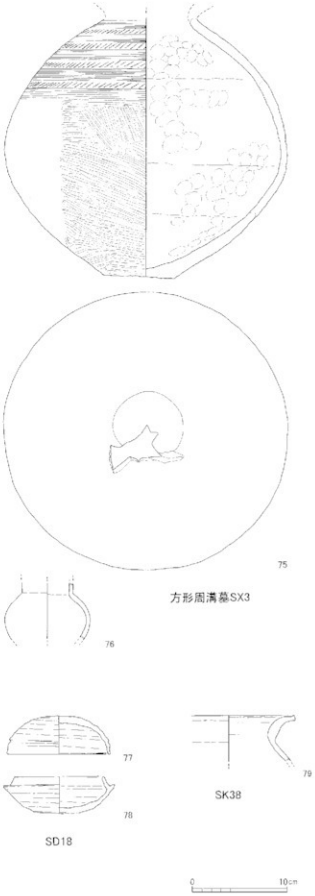


第40図 ＳＸ３遺構平面図（１：100）及び土層断面図（１：20）、遺物出土状況図（１：20）

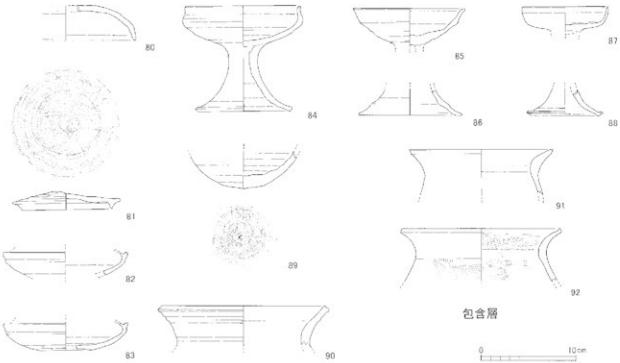


1. 10YR5/4　にぶい黄褐色粗砂質土、花崗岩粒、小円礫（φ1～2cm）をまばらに含む。しまり有、粘性弱。
2. 10YR5/4　にぶい黄褐色土　1に似るが、礫が少ない。
3. 10YR6/8　明黄褐色土、黄褐色包含層土、地山、黄灰色砂の混合土。

第41図　ＳＤ18遺物出土状況図及び土層断面図（１：20）



第42図　遺構出土遺物実測図（１：４）



第43図 包含層出土遺物実測図（1：4）

Ⅶ　広永城跡

1　曲輪

曲輪１　尾根状の小ピークにある長軸15m・短軸10m程の楕円形の曲輪である。標高は37m、曲輪２との比高差は2.5m程である。城外に接する曲輪の東側斜面は比高差20m程の急崖になっている。曲輪部分は北西部分が最も高く、東や南に向かってなだらかに傾斜する。建物跡や遺物は確認できなかった。

曲輪２　曲輪１の裾をめぐる70m×15m程の長方形の曲輪である。標高は34m前後である。北半部では曲輪が西に張り出す。

発掘では曲輪の東半分を調査した。建物跡や遺物は確認できなかった。

曲輪３　調査区外にある、堀２の南端部に向けて張り出すように造られた小規模な曲輪である。

2　堀

曲輪１・２の北と西には、周囲をめぐる空堀がある。西側の堀２は発掘調査区外にある。また、後述する土塁の北には堀３がある。

堀１（ＳＤ17）　調査区の北で検出した堀。曲輪２からの深さは４mを越える。調査区外で堀２とつながり、曲輪１・２を囲む。東側ではゆるやかになるものの、斜面を下る竪堀となる可能性がある。

堀２　調査区外にある。曲輪１・２の西に続く尾根を絶ち切った堀。南半部は自然の谷を利用し幅広であるが、北半部では幅が狭くなっている。

堀３　調査区外にある土塁の北に造られた堀である。

3　土塁（ＳＡ16）

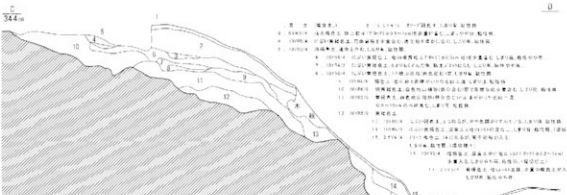
堀２の北、調査区の北隅で土塁を検出した。堀１と堀３の間に築かれている。堀内での行動を牽制するための施設と思われる。

4　まとめ

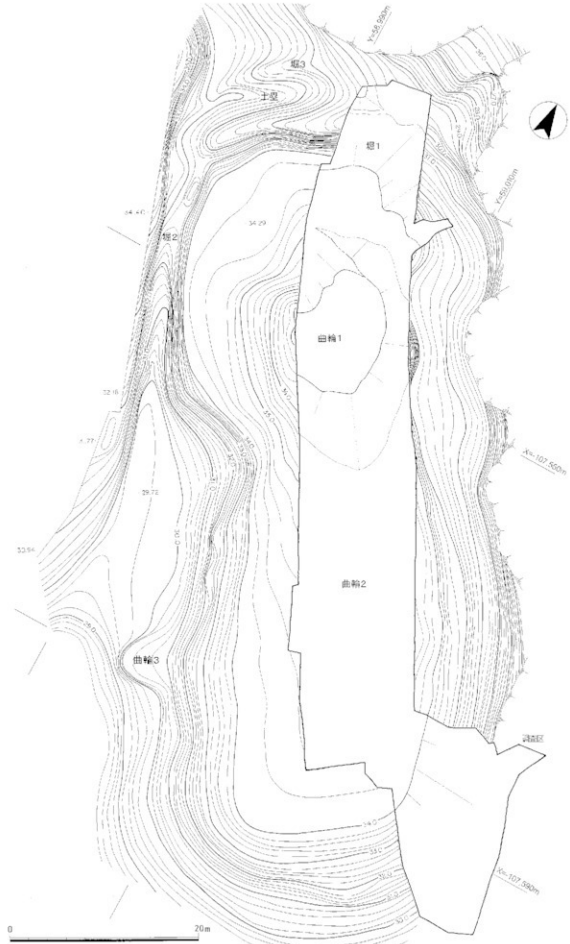
今回の発掘調査は、広永城跡の南東隅で行われた。この部分は宅地開発から免れ、わずかに遺構が残っていた部分でもある。

発掘調査の結果、尾根の西と北を堀によって切断し、小ピークとその裾に２つの曲輪が築かれていたことを確認した。この部分は城外にも面しており、東からの攻撃に対して城全域を防衛するための最前線であると考えられる。曲輪群は東と南を急崖に、北と西を堀に囲まれているため、戦況が悪化すると退路を失う恐れが十分ある。発掘調査では、城郭が機能していた時期の建物は言うに及ばず、遺物などの生活痕跡は全くみつからなかった。このことは逆にこの曲輪群が、戦闘に特化した場所であり、平常時は使用されていなかったことの傍証になると考えられる。

（竹田）



第44図　城跡土層断面図（１：80）



第45図 城跡関係遺構配置図（1：400）

No.	登録番号	器種	器形	遺構名	出土地区	出土位置	取上げ番号	口径 cm	器高 cm	その他 cm	胎　土	焼成	色　調	残 存	備 考
1	001-02	須恵器	杯蓋	1 号墓	E-6	SX 1	No.12	9.4	4.1	－	やや密	良	7.5Y5/1 灰	口縁部 3/12	
2	001-03	須恵器	杯蓋	1 号墓	E-6	SX 1	No.16	10.3	2.9	－	密 (～1㎜砂粒微量に含む)	不良	2.5Y8/2 灰白	口縁部 完存	
3	004-02	須恵器	杯蓋	1 号墓	E-5	SX 1 埋土 トレンチ埋土		11.0	4.0	－	密	良	2.5Y7/2 灰黄	口縁部 1/12以下	
4	003-02	須恵器	杯身	1 号墓	E-6	SX 1	No.17	8.1	2.6	－	やや密 (～1㎜砂粒含む)	良	5Y6/1 灰	口縁部 10/12	
5	002-01	須恵器	杯身	1 号墓	E-5 D-5	SX 1 埋土 整地土 表土		10.4	3.2	底径 6.6	密	良	N6/ 灰	口縁部 2/12	
6	002-02	須恵器	杯身	1 号墓	E-5 E-4	SX 1 埋土 整地土 整地土		－	－	底径 5.6	密	良	N6/ 灰	底部 6/12	
7	004-01	須恵器	長頸瓶	1 号墓	E-5 E-6	SX 1 整地土 旧表土	No.28	8.4	－	－	密	良	2.5Y5/1 黄灰	口縁部 1/12	
8	001-01	須恵器	甕	1 号墓	E-6 C-5	SX 1 旧表土	No.13・14・25	－	－	頸部径 15.0	密 (～2㎜砂粒含む)	良	内： 2.5Y6/1 黄灰 外：7.5YR6/1 褐灰	1/2	
9	001-04	土師器	高杯	1 号墓		SX 1	No.31	12.7	6.8 ～ 7.0	底径 7.6	やや密 (～2㎜砂粒含む)	並	7.5YR8/4 浅黄橙	底部 6/12	
10	002-03	土製品	管玉?	1 号墓		SX 1 第7層埋土 玄室東側		縦 1.1	横 0.5	重量 0.38g	密	土師質	2.5Y7/4 浅黄		
11	002-04	土師器	甕	1 号墓		SX 1	No.15・18～21・24	21.6	－	－	やや密 (～3㎜小石含む)		10YR8/4 浅黄橙	口縁部 1/12	
12	003-01	ホルンフェルス	線刻礫	1 号墓		SX 1		(長) 18.5	(幅) 14.7	厚 6.95					
13	013-03	須恵器	杯蓋	2 号墓		SX11下層	No.19	－	－	底径 10.8	やや粗 (～2㎜小石含む)	良	N5/ 灰	底部 2/12	
14	012-02	須恵器	杯蓋	2 号墓	D-5 E-5	SX11 B区 旧表土 整地土	No.3	11.7	3.9	－	密 (～1㎜砂粒微量に含む)	良	N6/ 灰	口縁部 5/12	
15	014-01	須恵器	杯蓋	2 号墓		SX11 掘出し埋土	No.45	－	－	底径 13.6	やや密 (～3㎜小石含む)	良	N5/ 灰	底部 3/12	
16	014-02	須恵器	杯身	2 号墓		SX11 ｻﾌﾞﾛｯｸ第1層		10.0	3.2	底径 6.6	やや密 (～3㎜小石含む)	不良	5Y7/1 灰白	口縁部 2/12	
17	014-03	須恵器	杯身	2 号墓		SX11 第1層	No.27	10.2	3.5	底径 6.0	やや密 (～2㎜小石含む)	良	N6/ 灰	口縁部 4/12	
18	013-04	須恵器	杯身	2 号墓		SX11下層	No.21	－	－	－	やや粗 (～2㎜小石含む)	良	10Y7/1 灰白	小片	
19	012-01	須恵器	高杯	2 号墓	D-6	SX11下層 旧表土	No.13	11.7	11.7 ～ 11.8	底径 10.1	密 (～1㎜砂粒含む)	良	N6/ 灰	底部 8/12	
20	011-02	須恵器	高杯	2 号墓		SX11 玄室	No.2	9.6	11.1 ～ 11.3	底径 8.3	やや密	良	10YR8/2 灰白	口縁部 完存	
21	013-01	須恵器	高杯	2 号墓		SX11下層	No.25	－	－	底径 11.2	密	良	N6/ 灰	底部 4/12	
22	011-01	須恵器	平瓶	2 号墓		SX11 玄室	No.1	4.9	10.75	－	粗 (～3㎜砂粒を含む)	良	7.5R5/2 灰赤	口縁部 6/12 他完存	
23	013-05	須恵器	把手	2 号墓		SX11下層	No.34	－	－	長 7.7	密	良	5Y6/1 灰	小片	
24	014-04	土師器	甑	2 号墓		SX11 玄室		縦 5.2	横 8.6		やや密 (～2㎜小石含む)		10YR7/4 にぶい黄橙	底部 小片	

第 2 表　遺物観察表

No.	登録番号	器種	器形	遺構名	出土地区	出土位置	取上げ番号	口径 cm	器高 cm	その他 cm	胎土	焼成	色調	残存	備考
25	013-06	土製品	管玉	2 号墓		SX11 玄室内		—	—	縦1.3 横0.9	密	良	2.5Y8/2 灰白		22内出土
26	013-02	土師器	甑？	2 号墓		SX11下層	No.15	—	—	—	やや粗 (～3mm小石含む)		10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部小片	
27	012-03	土師器	甕	2 号墓		SX11下層	No.18	30.4	—	—	やや密 (～3mm小石含む)		10YR8/4 浅黄橙	口縁部1/12	
28	027-01	銅製品	耳環	2 号墓		SX11 玄室内	No.4	縦 2.3	横 2.6	重量 10.825g					29と対
29	027-02	銅製品	耳環	2 号墓		SX11 ｲﾌﾞﾛｯｸ 第11層	No.36	縦 2.3	横 2.6	重量 10.730g					28と対
30	008-02	須恵器	杯身	3 号墓		SX 7	No.16	9.3	3.8	—	密	良	10Y6/1 灰	口縁部完存	体部に月の輪状に赤彩有り
31	007-04	須恵器	杯身	3 号墓	D-6	SX 7 B7ﾞﾛｯｸ		9.5	—	—	密	不良	5Y6/1 灰		
32	007-01	須恵器	高杯	3 号墓	D-7 C-7	SX 7 ﾍﾞﾙﾄ内第1層 旧表土 旧表土		受部径 13.0	—	底径 9.0	密	不良	5Y7/1 灰白	7/12	
33	008-01	須恵器	平瓶	3 号墓		SX 7	No.17	7.0	14.3	—	やや粗 (～3mm砂粒含む)	良	2.5Y8/2 灰白	口縁部完存	底部ヘラ記号
34	009-04	須恵器	甕	3 号墓		SX 7	No.67	—	—	—	やや密 (～2mm小石含む)	良	N4/ 灰		
35	009-03	須恵器	細頸瓶	3 号墓		SX 7 a	No.5	—	—	底径 6.8	密	良	5Y6/1 灰	底部1/12	
36	010-01	土師器	甕	3 号墓	C-7	SX 7		15.2	—	—	密	並	10YR7/6 明黄褐	口縁部2/12	
37	007-02	土師器	小型甕	3 号墓		SX 7	No.28・62・70・40・69	13.9	—	—	密 (～1.5mm砂粒微量に含む)	並	7.5YR7/6 橙	口縁部2/5	
38	007-03	土師器	小型甕	3 号墓		SX 7 羨道C区	No.76	11.8	—	—	密	並	7.5YR8/4 浅黄橙	口縁部1/3	内外共に部分的に丞付着
39	009-06	土製品	輔羽口	3 号墓		SX 7 A7ﾞﾛｯｸ墓道	No.79	復元径 2.9	厚 1.8		粗 (～7mm小石含む)	並	2.5Y7/3 浅黄		
40	005-01	滑石	丸玉	3 号墓		SX 7	No.1	縦 1.35	横 1.5	重量 3.17g			5BG7/1 明青灰		
41	005-06	滑石	丸玉	3 号墓		SX 7 玄室	No.6	縦 1.15	横 1.3	重量 2.15g			5Y8/1 灰白		
42	005-02	滑石	丸玉	3 号墓		SX 7	No.2	縦 1.1	横 1.3	重量 1.84g			5Y8/1 灰白		
43	005-07	滑石	丸玉	3 号墓		SX 7	No.7	縦 1.15	横 1.4	重量 2.48g			5Y8/2 灰白		
44	005-03	滑石	丸玉	3 号墓		SX 7	No.3	縦 1.1	横 1.5	重量 2.26g			N6/ 灰		
45	005-10	滑石	丸玉	3 号墓		SX 7	No.18	縦 1.2	横 1.45	重量 2.97g					
46	005-04	滑石	丸玉	3 号墓		SX 7	No.4	縦 1.2	横 1.4	重量 2.83g			N5/ 灰		
47	005-11	滑石	丸玉	3 号墓		SX 7	No.20	縦 1.05	横 1.25	重量 0.70g					
48	005-05	滑石	丸玉	3 号墓		SX 7	No.8	縦 1.2	横 1.4	重量 2.99g			5Y8/2 灰白		

第 3 表　遺物観察表

No.	登録番号	器種	器形	遺構名	出土地区	出土位置	取上げ番号	口径 cm	器高 cm	その他 cm	胎土	焼成	色調	残存	備考
49	005-12	滑石	丸玉	3 号墓		SX 7 Fブロック7層下		縦 1.2	横 1.35	重量 0.88g					
50	005-08	土製品	管玉	3 号墓		SX 7	No.9	縦 2.1	横 0.7	重量 1.18g		土師質	2.5Y8/4 淡黄		
51	009-02	土製品	玉	3 号墓		SX 7 B7 ロット24層		縦 1.4	横 0.4	重量 0.45g			2.5Y8/3 淡黄		
52	009-01	土製品	管玉	3 号墓		SX 7 第4層B7 ロット		縦 0.5	横 0.55	重量 0.13g			2.5Y8/3 淡黄		
53	009-05	土製品	玉？	3 号墓		SX 7 玄室内		縦 1.9	横 1.3	重量 2.78g			2.5Y8/2 灰白		33内出土
54	026-01	銅製品	耳環	3 号墓		SX7	No.11	縦 2.2	横 2.4	重量 7.587g					55と対
55	026-02	銅製品	耳環	3 号墓		SX7	No.12	縦 2.3	横 2.5	重量 7.808g					54と対
56	026-03	銅製品	耳環	3 号墓		SX7	No.14	縦 2.1	横 2.3	重量 5.098g					57と対
57	026-04	銅製品	耳環	3 号墓		SX7	No.15	縦 2.0	横 2.3	重量 5.275g					56と対
58	022-04	須恵器	杯蓋		D-5	土器集中区		12.0	－	－	密	良	2.5Y7/1 灰白	口縁部 1/12	
59	022-02	須恵器	横瓶？			土器集中区		12.0	－	－	密	良	2.5Y7/1 灰白	口縁部 3/12	
60	030-01	須恵器	提瓶			土器集中区					やや密 （～3mm小石含む）	良	2.5Y7/1 灰白	体部 2/12	
61	031-01	須恵器	横瓶？			土器集中区					やや粗 （～4mm小石含む）	良	N7/ 灰白	小片	
62	021-01	土師器	甑		D-6 D-5	土器集中区 整地土 旧表土		－	－	底径 12.4	やや密 （～1mm砂粒含む）	並	10YR7/4 にぶい黄橙	底部 2/12	
63	022-01	土師器	甕?		C-3	土器集中区		18.8	－	－	やや粗 （～5mm小石含む）		10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部 2/12	
64	019-01	土師器	甕		D-6 D-5 C-5	土器集中区 旧表土 旧表土 整地土		17.8	－	－	やや粗 （～1mm砂粒含む）	並	7.5YR7/6 橙	口縁部 1/4	
65	018-01	土師器	甕		D-5	土器集中区 旧表土		20.4	－	－	やや粗 （～2mm砂粒含む）	並	10YR7/6 明黄褐	口縁部 10/12	
66	020-01	土師器	鍋		C-6 D-6	土器集中区 整地土 旧表土		28.8	－	－	やや粗 （～1.5mm砂粒多く含む）	並	7.5YR7/6 橙	口縁部 1/3	
67	022-03		軽石		D-5	土器集中区		（縦×横） 5.8	（幅） 3.8	重量 16.7g			2.5Y8/4 淡黄		
68	016-02	須恵器	杯蓋	1 号墳		SX13 玄室内	No.9・ 11・14	9.6	3.1	－	密	やや 不良	2.5YR5/3 にぶい赤褐	口縁部 8/12	
69	016-03	須恵器	杯身	1 号墳		SX13 玄室内	No.6	8.9	2.9	－	やや粗 （～1.5mm砂粒含む）	良	N5/ 灰	口縁部 完存	
70	016-01	須恵器	杯身	1 号墳		SX13	No.16	12.1	4.1	－	粗 （～1.5mm砂粒含む）	良	2.5Y6/1 黄灰	口縁部 完存	
71	015-01	須恵器	平瓶	1 号墳		SX13 玄室内	No.8・15	9.8	－	－	密	良	2.5Y7/1 灰白	口縁部 完存	
72	016-04	土師器	高杯	1 号墳		SX13 玄室内	No.7	－	－	－	密	不良	2.5YR5/8 明赤褐		

第 4 表　遺物観察表

No.	登録番号	器種	器形	遺構名	出土地区	出土位置	取上げ番号	口径 cm	器高 cm	その他 cm	胎土	焼成	色調	残存	備考
73	028-01	鉄製品	釘	1号墳		SX13 玄室内		長4.1	断面 0.4×0.5 最部 1.42×1.6	重量 5.448g					
74	029-01	鉄製品	直刀	1号墳		SX13 玄室内		全長98.2 刀部87.7 茎部11.5	刃部幅 2.5 茎部幅 1.9	厚 0.6					
75	006-01	土師器	広口壺	SX3		SX 3		胴部径 30.0	–	底径 7.5	やや密 (~1mm砂粒少量含む)	並	7.5YR7/6 橙		底部穿孔・赤彩
76	005-09	土師器	壺	SX3		SX 3	No.20	–	–	–	やや密 (~3mm小石含む)		10YR7/6 明黄褐		
77	017-01	須恵器	杯蓋	SD18		SD18 第2層	No.1	11.0	4.1	–	密	良	2.5Y7/2 灰黄	口縁部完存	外面黒斑有り
78	017-02	須恵器	杯身	SD18		SD18 第2層	No.2	9.4	3.9	受部径 11.7	密	良	2.5Y7/2 灰黄	口縁部完存	
79	017-04	土師器	甕	SK38	F-5	SK-38	No.4・5	–	–	–	やや粗 (~4mm小石含む)		2.5Y8/3 淡黄	口縁部小片	
80	023-04	須恵器	杯蓋	包含層	C-7 C-8	旧表土		–	–	–	やや密 (~3mm小石含む)	良	N5/ 灰		
81	023-02	須恵器	杯蓋	包含層	C-7 C-5	旧表土 旧表土		–	–	(受部径) 9.4	密	良	N6/ 灰		ヘラ記号有り
82	024-02	須恵器	杯身	包含層	D-5	整地土		–	–	–	やや密 (5mm小石含む)	良	7.5Y5/1 灰	口縁部小片	
83	024-01	須恵器	杯身	包含層	D-5	整地土		–	–	底径 5.0	密	良	2.5Y7/1 灰白	底部2/12	
84	023-01	須恵器	無蓋高杯	包含層	C-9	ｴﾘﾄﾘ/ｶﾞﾚｷ層下 旧表土		12.0	11.1	底径 9.7	やや密 (~1.5mm砂粒若干含む)	良	N5/ 灰		
85	023-03	須恵器	高杯	包含層	E-5	旧表土		11.7	–	–	密	良	N6/ 灰	口縁部1/12	
86	023-05	須恵器	高杯	包含層	C-9	第3層下 包含層		–	–	底径 11.0	密	不良	5Y8/1 灰白	底部2/12	
87	017-03	須恵器	高杯	包含層		SK27 ｱｼﾞﾛｸ		9.0	–	–	密 (~2mm小石含む)	良	2.5Y7/1 灰白	口縁部3/12	
88	025-01	須恵器	高杯	包含層	F-17	包含層		–	–	底径 7.2	密	良	N7/ 灰	底部3/12	
89	024-04	須恵器	壺	包含層	E-4	整地土		–	–	–	密	良	7.5Y6/1 灰		ヘラ記号有り
90	024-03	須恵器	壺	包含層	D-7	整地土		17.4	–	–	密	良	2.5Y7/2 灰黄	口縁部2/12	
91	024-06	土師器	甕	包含層	C-6	ｾﾞﾝHA田表土		15.2	–	–	やや密 (~3mm小石含む)		10YR7/6 明黄褐	口縁部1/12	
92	024-05	土師器	甕	包含層	E-4	整地土		16.4	–	–	やや密 (~3mm小石含む)		7.5YR6/2 灰褐	口縁部2/12	

第５表　遺物観察表

Ⅷ　自然科学分析

今回自然科学分析として、広永1号墳（ＳＸ13）出土の金銅装大刀に付着していた木質の樹種同定及び膜状物質の同定と広永横穴墓群2号墓及び3号墓出土の耳環の製作方法を推定するため成分分析を行った。いずれも財団法人元興寺文化財研究所に委託した。以下にその結果を述べる。また、横穴３号墓から出土した人骨片は土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムに運び、松下孝幸氏に同定して頂いた。その結果は『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2002）第Ⅴ章に掲載されているので、そちらを参照していただきたい。

広永横穴墓群・広永古墳群出土の金属製品の分析

財団法人　元興寺文化財研究所

1　調査対象遺物

№1　　金銅装直刀（74）

№2～7　耳環（54～57・28・29）

2　調査内容

№1　金銅装直刀については、鞘木の樹種同定、及び付着していた膜状物質の同定を行った。

№2～7　耳環は表面から非破壊でケイ光Ｘ線分析（以下、ＸＲＦ）による元素分析を行った。

なお、耳環の鉛同位体比測定を予定していたが、遺物中の鉛が確認できないか、含有量が極めて少ない状況であったため、測定は不可能であった。

3　使用機器及び測定条件

● エネルギー分散型ケイ光Ｘ線分析装置

（セイコーインスツルメンツ(株)製　ＳＥＡ5230）

試料の微小領域にＸ線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光Ｘ線を検出することにより元素を同定する。

モリブデン管球使用、大気条件下

コリメータ　0.1mm、管電圧50kV（微小部）

コリメータ　1.8mm、管電圧45kV

● 実体顕微鏡

（(株)オリンパス製ＳＺＨ－ＩＬＬＤ）

● 金属顕微鏡

（(株)オリンパス製ＢＨ２－ＵＭＡ）

● 走査型電子顕微鏡（ＳＥＭ）

（株式会社日立製作所製　Ｓ４１５型）

● フーリエ変換型赤外分光光度計（ＦＴ－ＩＲ）

（日本電子(株)製　ＪＩＲ－６０００）

赤外線を試料に照射することにより得られる、分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し化合物の種類を同定する。

測定条件：微量の試料をＫＢｒ（臭化カリウム）と混ぜ合わせプレスして錠剤にする。

4　膜状物質の成分分析

（１）方法

遺物の表面で一部剥離していた膜状物質（巻頭カラー７）を極微量採取し、超音波洗浄した後、ＫＢｒ錠剤法で赤外分光分析を行った。

（２）結果

ＦＴ－ＩＲによる分析の結果、3430・2930～2860・1730・1630・1430・1260cm^{-1}付近に、漆に由来する吸収（標準試料　第48図）が確認された（第49図）。

5　樹種同定

（１）方法

金属遺物、特に鉄製遺物に伴う有機物は、錆化し、組織の形のみを保持している場合が多い。直刀の鞘木も同様であり、通常行う徒手による切片作成ができなかったため、以下の方法で鑑定を行った。

直刀の鞘木の用材（巻頭カラー７）を微量採取し試料とした。樹種の同定には組織を観察する必要があるため、木口面（横断面）、柾目面（放射断面）の面出しを、徒手やカミソリを用いて行った。板目面は試料が少なく、断面を出すことができなかった。

ＳＥＭ及び、金属顕微鏡の暗視野で組織観察と写真撮影を行った。

（２）結果

針葉樹であり、早材から晩材への移行が緩やかで、樹脂道やラセン肥厚はみられなかった。錆化してい

るため明瞭ではなかったがヒノキ型と考えられる分野壁孔が1分野に2個みられ、ヒノキの可能性が高いと考えられた（巻頭カラー7）。

6　耳環のＸＲＦ分析

各遺物の分析箇所は巻頭カラー8にＸＲＦスペクトルは第49～60図、検出元素、耳環の法量は第6表にまとめた。

（1）№2　耳環（54）

芯②の主成分は銅（Ｃｕ）である。ほかにはヒ素（Ａｓ）、セレン（Ｓｅ）、銀（Ａｇ）、鉛（Ｐｂ）をわずかに検出している。

表面の金色部分①では、さらに金（Ａｕ）、水銀（Ｈｇ）を検出した。

遺物の状態と分析結果とから判断して、銅芯の上にアマルガム法で鍍金をしたか、水銀で金箔を貼り付けたかどちらかであるとみられる。しかし腐食により金が失われている部分が多く、詳細を確認することはできなかった。銅芯は微少量のヒ素、銀、鉛を当初から含んでいたものと推測する。

（2）№3　耳環（55）

分析結果及び遺物の状態は№2の耳環と同様である。また法量の値も近いため、№2と3は対として製作されたものである可能性が高いと考える。

（3）№4　耳環（56）

芯部分②からは主に銅を検出し、他にヒ素、銀、セレン、鉄（Ｆｅ）を検出している。鉄は土壌成分に由来するものとみられる。表面の①ではさらに金と水銀を確認した。

微少量のヒ素、銀を含む銅芯の表面に金を施したものとみられる。金による装飾の方法は№2、3同様に判断できなかったが、水銀を用いていることは確かである。

（4）№5　耳環（57）

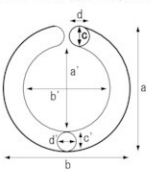
分析結果及び遺物の状態は№4の耳環と同様である。また法量の値も近いため、№4と5は対として製作されたものである可能性が高いと考える。

（5）№6　耳環（28）

芯部分②からは主に銅を検出し、他にヒ素、銀、鉄を含んでいた。表面金色部分の①からはさらに金と水銀、加えて銀のピークが顕著に現れた。これらの結果と遺物の状態から判断して、銅芯（ヒ素、銀を含む）に銀板を巻き、その上に水銀を用いて金を施したと考えられる。

（6）№7　耳環（29）

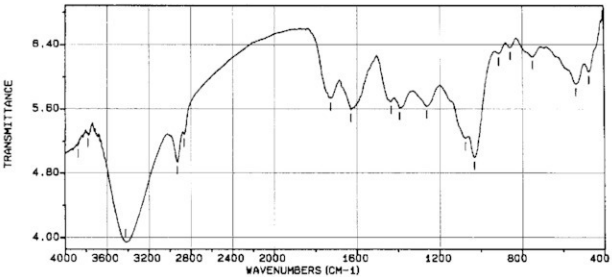
分析結果及び遺物の状態は№6の耳環と同様である。また法量の値も近いため、№6と7は対として製作されたものである可能性が高いと考えられる。



第46図　耳環計測位置

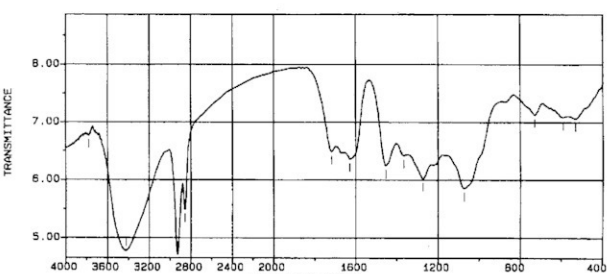
No.	報告番号	遺物名	重量（g）	a（mm）	b（mm）	a'（mm）	b'（mm）	c（mm）	d（mm）	c'（mm）	d'（mm）	分析箇所	検出元素	挿図番号
2	54	耳環	7.5	22.1	24.2	12.8	14.9	4.3	4.9	4.8	4.9	①表面金色部分	Cu・Au・Hg・As・Ag	第49図
												②芯灰色部分	Cu・As・Ag・Au・Se・Pb	第50図
3	55	耳環	7.7	22.7	24.6	13.6	15.0	4.7	4.8	5.0	4.9	①表面金色部分	Cu・Au・Hg・Ag	第51図
												②芯灰色部分	Cu・As・Ag・Au・Se・Pb・Fe	第52図
4	56	耳環	5.0	21.3	22.9	13.9	14.6	3.6	4.4	3.9	4.3	①表面金色部分	Cu・Au・Hg・Ag	第53図
												②芯黒色部分	Cu・As・Au・Ag・Se・Fe	第54図
5	57	耳環	5.2	20.4	22.9	13.1	14.8	3.7	4.2	4.1	4.2	①表面金色部分	Cu・Au・Hg・As・Ag・Fe	第55図
												②芯灰色部分	Cu・As・Au・Ag・Fe	第56図
6	28	耳環	10.7	22.6	25.6	12.4	15.4	4.9	6.2	5.2	6.0	①表面金色部分	Cu・Ag・Au・Hg・As	第57図
												②芯黒灰色部分	Cu・As・Ag・Fe	第58図
7	29	耳環	10.5	22.8	26.0	12.6	15.1	4.7	6.1	5.5	6.2	①表面金色部分	Ag・Au・Hg・Cu	第59図
												②芯淡緑色部分	Cu・As・Ag・Fe	第60図

第6表　耳環一覧表



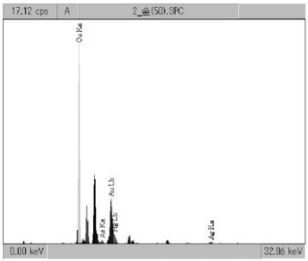
RESOL : 4cm-1	3874.34	5.15	1076.10	5.25
SCANS : 1000	3779.84	5.29	1031.74	5.00
AMPGAIN : x32	3425.00	3.95	914.10	6.30
P.INT : 2cm-1	2929.38	4.94	858.18	6.37
BEAM : single	2861.88	5.29	750.18	6.25
S.SPEED : T6S	1727.93	5.74	538.05	5.92
S.NUMBER: 1102	1629.57	5.59	474.41	6.07
M.DATE : 5/23/0	1434.80	5.69		
	1394.30	5.62		
	1283.18	5.64		

第47図　膜状物質のFT－IRスペクトル

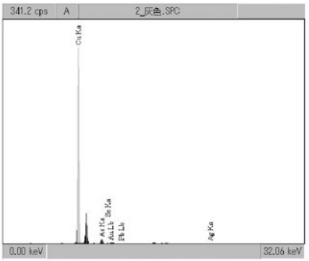


RESOL : 4cm-1	3779.84	6.77	728.97	7.13
SCANS : 875	3425.00	4.78	590.12	7.09
AMPGAIN : x16	2927.45	4.72	530.93	7.08
P.INT : 2cm-1	2858.09	5.49		
BEAM : single	1718.28	6.49		
S.SPEED : T6S	1629.57	6.36		
S.NUMBER: 667	1452.15	6.25		
M.DATE : 12/11/98	1365.37	6.42		
	1272.80	6.03		
	1072.24	5.86		

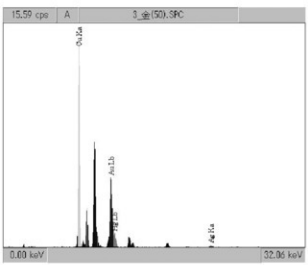
第48図　漆膜標準試料のFT－IRスペクトル



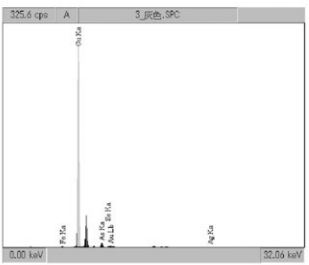
第 49 図　耳環（54）①の XRF スペクトル



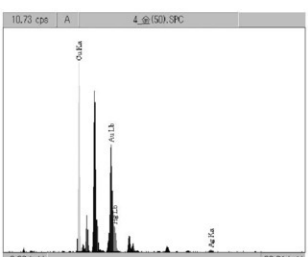
第 50 図　耳環（54）②の XRF スペクトル



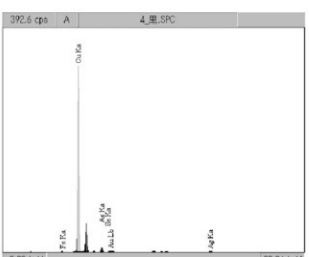
第 51 図　耳環（55）①の XRF スペクトル



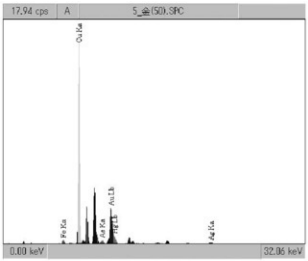
第 52 図　耳環（55）②の XRF スペクトル



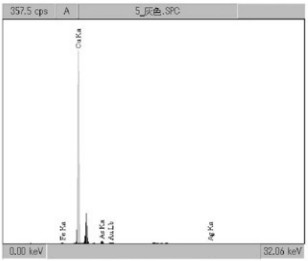
第 53 図　耳環（56）①の XRF スペクトル



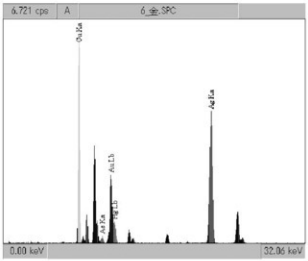
第 54 図　耳環（56）②の XRF スペクトル



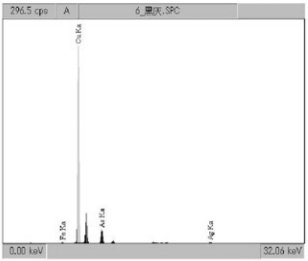
第 55 図　耳環（57）①の XRF スペクトル



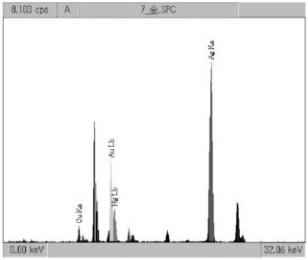
第 56 図　耳環（57）②の XRF スペクトル



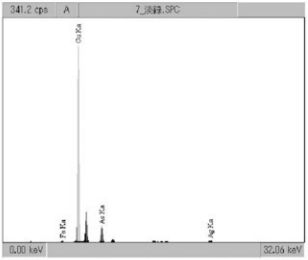
第 57 図　耳環（28）①の XRF スペクトル



第 58 図　耳環（28）②のスペクトル



第 59 図　耳環（29）①の XRF スペクトル



第 60 図　耳環（29）②の XRF スペクトル

Ⅸ　まとめ

1　遺跡の時期的変遷

広永遺跡は古墳時代初頭から中世後期までの複合遺跡である。確認できた遺構は少ないが、それぞれの時期で遺跡の性格が違う。ここでは時期的な変遷をもとに遺跡の概要を述べる。

1　古墳時代初頭

南尾根に方形周溝墓が築かれる。この時代の遺構はこの方形周溝墓のみだが、遺跡南西部、現在住宅団地となっている部分で昭和34年の工事中に弥生土器片が採集されており、弥生時代の集落が広がっていたとされている。また同じ丘陵上で0.3km北に離れた城ノ谷遺跡では弥生後期以降の集落が確認されており[1]、当遺跡は周辺の墓域であった可能性が高い。

2　古墳時代後期

北尾根に横穴墓、やや遅れて南尾根に横穴式石室が築かれる。同一丘陵上に異なった墓制による造墓が行われる点が興味深い。遺跡の北西には金塚横穴墓群・菟上横穴墓と他にも横穴墓が確認されており、当地域の古墳時代墓制の一つとして認識されていたと思われる。この後、城として利用されるまで人々の営みは断絶する。（角正）

3　中世後期

広永城跡としての調査では、曲輪・堀切・土塁を確認した。調査地は広大な城域の南東端になり、城全体の防御の重要地点であると考えられる。（竹田）

2　横穴墓群と古墳について

今回の調査では北尾根の東斜面に3基の横穴墓と3基の横穴墓痕跡を、南尾根に横穴式石室を持つ古墳を確認した。ここでは横穴墓について近接する金塚横穴墓群や菟上横穴墓などの事例と比較しつつ若干の考察をし、また古墳と横穴墓の比較も踏まえて当地域の墓制に迫りたい。

1　横穴墓の立地と分布

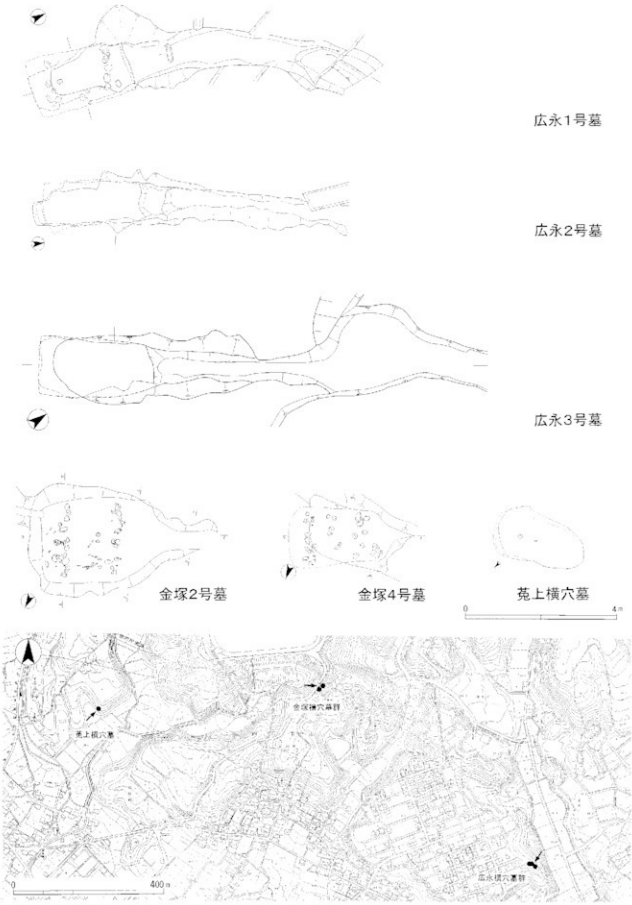
すでに述べてきた通り、広永横穴墓群は標高37mの丘陵上に位置する。残存のよい1～3号墓と痕跡のみ確認した4～6号墓いずれも丘陵東側の標高34m付近の斜面に等高線と直交するように造墓されている。近接する金塚横穴墓群[2]はやはり標高75mの丘陵上に位置し、こちらは西側の標高60m付近の斜面に造墓されている。金塚横穴墓群も尾根に対し直交方向に掘りこまれていたようである。菟上横穴墓[3]は丘陵上に位置するが、丘陵を開析する谷（ＳＴ804）の東斜面、標高28m付近に等高線に直交方向に造墓されている。いずれの遺跡も確認できた数が少なく、群を形成するといった周辺の状況は不明である。但し、後世の開発に伴い地形が大きく改変されているので、他にも存在した可能性はある。地質的には広永横穴墓群が東海層群中の大泉累層（Ｔｏ）に由来する砂質土、金塚横穴墓群は東海層群中の暮明累層（Ｔｇ）に由来する砂質土[4]で、掘削は容易な場所であったと考えられる。

2　横穴墓の形態

広永横穴墓群の3基は玄室平面形が長方形ないしは台形を呈している。いずれも両袖ははっきりとせず、墓道へと至っている。天井部に関してはいずれも崩落しており、詳細は分からない。金塚横穴墓群は玄室平面形が略長方形を呈し、玄室と羨道の境に明瞭な袖を有する。天井部は広永横穴墓群同様、崩落しておりはっきりとしない。菟上横穴墓は玄室部分しか残っておらず詳細は分からないが、玄室平面形は長方形を呈すると思われ、どちらかといえば広永横穴墓群の形態に似ているようである。

3　横穴墓の閉塞施設

広永横穴墓群ではいずれも明確なものは確認できなかった。3号墓の羨門付近に凹凸面が存在しており、何らかの閉塞施設があった可能性もあるが、断定はできない。金塚横穴墓群でも閉塞施設は見つかっておらず、どのような閉塞がなされていたかは不明である。



第61図　朝明郡内の横穴墓（1：100、1：10,000，矢印は造墓方向）

4　横穴墓の埋葬施設

広永横穴墓群1～3号墓ではいずれも玄室内の奥壁寄りと入口寄りに玄室主軸に対して直交方向に2列人頭大の礫が並置されているのが確認された。これらを棺台とすると木棺葬が考えられるが、それを裏付けるような釘等の資料は出土していない。金塚横穴墓群2号墓（SX13）では棺台となる円礫と共に鉄釘が複数出土しており、そこから木棺の大きさ（1.9m×0.6m）まで推定されている。ここから当地域の横穴墓の埋葬方法は、棺台を利用した木棺葬が採用されていたと考えられる。

また広永横穴墓群3号墓では複数個体の人骨片が出土しており、玄室内の棺台の位置からも一横穴一個体の埋葬ではなく、当初から複数個体を埋葬するつもりであったことは確実である。金塚横穴墓群で同時埋葬かは不明だが頭蓋骨が2個体並んで出土していることからも裏付けられよう。また、広永3号墓の人骨の出土位置は原位置を保っていなかったことがはっきりしており[3]、追葬もしくは改葬が行われた可能性もある。

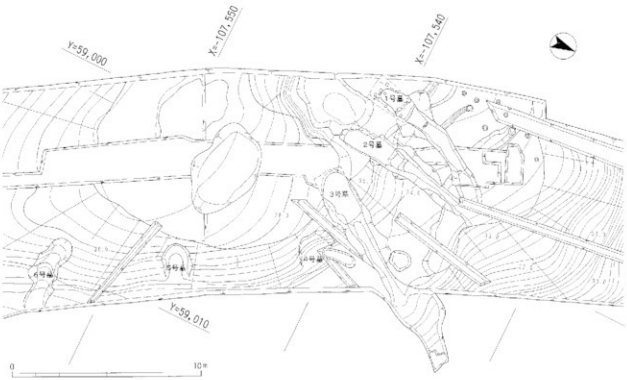
5　横穴墓の墓前祭祀

広永横穴墓群では、2号墓と3号墓の間の標高34m付近がやや平坦なテラス状となっている。いわゆる墓前域に相当すると考えられ、この部分で土器の集中出土や焼土が確認されたことから墓前祭祀行為が行われたとみられる。

墓前祭祀行為に関しては大分県上ノ原横穴墓群など全国各地の横穴墓群で、墓前域における挽火行為や土器の破砕散布行為が認められている[5]。特に土器の破砕散布行為は複数の横穴墓にまたがることが明らかになっている。広永横穴墓群においても2号墓・3号墓の墓道から出土した破片と墓前域に相当するテラス状の平坦地から出土した破片が接合しており、同様の行為があったと推測される。上ノ原横穴墓群ではこうした土器破砕散布行為に供される土器は甕・壺といった「飲用土器」が多いと言う特徴が指摘されているが、広永横穴墓群でも土師器甕や須恵器横瓶といった「飲用土器」がほとんどであり、共通点が窺える。

6　横穴墓の墳丘

有墳丘横穴墓は九州の竹並横穴墓群をはじめ、特に九州地方で確認されている。竹並横穴墓群では有墳丘横穴墓で群中に占める優位性が顕著にみられると指摘されている[7]。



第62図 墳丘と横穴墓（1：200）

当遺跡においては１～３号墓の位置関係をみてみると、前述したように３号墓は玄室と墓道の主軸が頂部に対し直線状に造営されている。それに対し、１・２号墓は３号墓に向けて主軸を曲げて造営されている。視点を変えると頂部の高まりに向かい造営されているように見え、墳丘として意識していた可能性がある。また墳丘頂部から須恵器の高杯が出土しており、墳丘上祭祀が行われた可能性もある。但し、九州地方でみられるような群中における優位性は出土遺物などからは明らかでない。最も近接する金塚横穴墓群では地形改変を受けていることもあり、墳丘を有したか判断しにくいが、墳丘上祭祀の痕跡などがみられないことから、可能性は低いと考えられている。

東海地方以北の遠江地域では、可能性があるものとして前山３号横穴や堀ノ内Ｄ１号横穴などがあげられているが、これらは菊川流域と原野谷川・逆川流域の初期横穴に伴うもので、北部九州のように群集している状況ではない。いずれも当横穴墓よりは古く、同時期の横穴墓が墳丘を持つ可能性は低いと考えられている[8]。

7　出土遺物

広永横穴墓と広永１号墳の差を明確に示しているもののひとつが遺物である。土器では須恵器の型式差から若干横穴墓の方が古いといえるが、その他に横穴墓からは滑石製の丸玉と耳環という装身具のみ、１号墳からは金銅装大刀という武器のみという大きな差がある。耳環は第Ⅷ章の分析の通り、金装のみのもの（54～57）と銀板に金をかぶせたもの（28・29）の２種類がある。製作方法が違うものは出土横穴墓も違うことから、これは時期差もしくは工人差のどちらかによるものかと思われるが不明である。また、金塚横穴墓群からも土器の他にやはり耳環が出土している。分析結果から金塚のものは銅芯に銀板を巻いたものが４点（その上に金装が施されたものを含む）、錫製のもの４点の２種類であることが分かっている[9]。菟上横穴墓からも分析は実施していないが、やはり金銅製の耳環が１点出土している。

8　横穴墓と古墳の被葬者像

ここまでの検討から広永横穴墓群と１号墳の被葬者像を考えてみたい。

まず、横穴墓群は北尾根を墳丘にみたて、尾根の東斜面に３号墓→１号墓→２号墓の順に造墓されている。ここから造墓集団は東から登ってきていると推測できよう。また、１基の横穴墓に複数回埋葬し、なおかつ複数基の造墓、また群全体にわたる祭祀の痕跡から、複数世代の墓地であったことは明らかである。副葬品としては土器の他耳環や滑石製丸玉など装身具しか持たない点も特筆できよう。

一方で古墳は南尾根に南南西に開口する形で築造されおり、横穴墓とは全く反対方向から造墓されているといえる。副葬品も土器の他には装身具は全くなく金銅装大刀という武器を持つ。金銅装大刀は威信財として中央政権から配布されたものであり、中央による在地支配の象徴と捉えられている[10]。このことからも古墳の被葬者は中央政権とつながりの強い軍事的性格をもつ人物とみてよいだろう。

広永横穴墓群の被葬者はこうした軍事的性格は弱いといえ、これは金塚横穴墓群の被葬者についても共通している。しかし、朝明川を挟んだ対岸の死人谷古墳群では、大刀及び金銅製の双龍環頭が出土しており、この地域のすべての横穴墓が軍事的性格が希薄で、中央とのつながりが弱いとはいえないだろう。但し、飾大刀が出土しないからといって中央とのつながりがないわけではなく、むしろそうした威信財が必要のない状態であったとも推測できる[11]。

また、墓制という点からみると、古墳と横穴墓という２つの墓制がみられる地域は多々あるが、どちらが主体となるかで自ずから被葬者の性格も変わってこよう。横穴墓が群集墳の一形態として認識されている地域とは違い、三重県は古墳を主体とし、ごく限られた地域に横穴墓が造られるといった状況である。こうした地域では横穴墓の被葬者像として渡来系集団が想定されている[12]。遺跡の位置する朝明郡は秦氏や倭漢氏など渡来系氏族の存在が知られており、それらとの関連を考えるべきだろう[13]。周辺は古墳時代を通じて、大規模な古墳が築かれていないのに対し、古代に入ると朝明郡衙跡である久留倍遺跡など有力遺跡が集中する。これら有力遺跡とつながるかどうか、周辺の状況を含め今後検討していきたい。

（角正）

3　北伊勢の城館と広永城跡

1　はじめに

広永城跡のある朝明川流域（旧朝明郡）は、北に隣接する旧員弁郡とともに大規模な城郭の集中地域とされている。これらの城跡には、主郭（城主の屋敷）とその周囲の小区画（被官の屋敷）から構成されるものが多い。本項では、これらの諸城と比較して、広永城跡の地域的な位置付けを考察したい。

2　主要大規模城館の検討

田辺城跡　いなべ市北勢町田辺に所在する。最も南には方形の主郭があり、その北の丘陵上に土塁・区画溝にかこまれた小区画が存在する。主郭の土塁や堀には数ヶ所の「折れ」を持っている。城域は東西400m・南北150m程であろうか。

大井田城跡　いなべ市大安町大井田に所在する。谷を挟んで二股状になる尾根のうち、西側尾根の北端に主郭を配し、その南に小区画が存在する。谷を挟んだ東側の尾根にも小区画が存在する。城域は東西250m・南北350m程であろうか。

保々西城跡　四日市市西村町に所在する。丘陵の南西端に主郭を配置し、その東と北に土塁や溝をもつ小区画が整然と並ぶ。主郭は土端幅が広く、数ヶ所に「折れ」を持っている。虎口への進入路も屈曲している。城域は東西250m・南北250m程であろうか。

伊坂城跡　四日市市伊坂町に所在する。今回触れる城館の中では唯一、発掘調査が行われている。東西にのびる尾根の西端に主郭を配し、その東に多くの小区画が存在する。発掘調査は尾根の東部で行われ、16世紀代の多数の掘立柱建物が確認され、これらの区画が屋敷地として機能していたことが明らかになっている[④]。

広永城跡　早くから宅地開発による破壊が進み、遺構の状況などはほとんど把握できていなかった。しかし近年、伊藤徳也氏は地籍図と昭和20年代の米軍による航空写真を駆使し、城域を復原されている[②]。

これによると広永城跡は、広永台団地全域を含む東西500m・南北400mの広大なものであり、その構造も台地の端部に主郭を置き、その周囲に堀に囲まれたいくつかの区画を配するものとなる。

伊藤氏が想定される城域の北東端には、東西からの谷に挟まれた細尾根があり、その外側には「城ノ谷」の地名も残っている。この地点では平成10・11年度に発掘調査が行われており、城郭に関連するような遺構・遺物は確認されていない[*]。このことから伊藤氏の想定する城域はほぼ正しく、広永城は上記の大規模な城館とほぼ同規模のものであった可能性が高い。

3　まとめ

広永城跡は前述のように、早くから破壊され、これまでその規模が論じられることはほとんどなかった。しかしながら近年の研究成果により、広永城の規模が、他の大規模城館に匹敵するものであったことが明かとなってきた。

また、旧朝明郡・員弁郡内ではこれら大規模な城館以外の中小規模の城館でも、主郭周辺に被官屋敷と思われる小区画が存在する城跡は多い。これらの中で、発掘調査が行われている伊坂城跡では、15世紀末～16世紀前葉に旧来の集落から分離し、丘陵部に、城郭と被官の屋敷地が形成され、それらは16世紀の後葉まで続いていたことが確認されている。他の諸城も、ほぼこれと前後する時期のものとみて差し支えないと思われる。

以上のことから16世紀の朝明郡・員弁郡には丘陵・台地状に領主・被官などの屋敷地が多く存在し、それらが旧来の集落と並存するといった景観が広く展開していた可能性が高い。（竹田）

註

① 金子智子『城ノ谷遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　2004年）

② 金塚横穴墓の各データについては以下の報告書によっている。
服部芳人ほか『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2002）

③ 菟上横穴墓の各データについては以下の報告書によっている。
穂積裕昌ほか『菟上遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2004）

④ 津村善博氏のご教示による。

田辺城跡（いなべ市）

大井田城跡（いなべ市）

伊坂城跡（四日市市）

保々西城跡（四日市市）

中上城跡（東員町）

第63図 北伊勢の中世城館（1：5,000）（註⑭及び参考文献　伊藤1997から引用）

⑤　松下孝幸「三重県広永横穴墓群、金塚横穴墓群出土の古墳時代人骨」（前掲註②）

⑥　『上ノ原横穴墓群Ⅱ』（大分県教育委員会、1991）

⑦　池上悟「日本の墳丘横穴墓」『立正大学文学部論叢』第109号（立正大学文学部、1999）

⑧　松井一明「袋井の群集墳と横穴群を考える（3）」『地蔵ヶ谷古墳群・横穴群』（袋井市教育委員会、2004）

⑨　（財）元興寺文化財研究所「金塚遺跡・金塚横穴墓群出土遺物のケイ光X線分析」（前掲註②）

⑩　岩原剛「東海の飾大刀」（『立命館大学考古学論集Ⅱ』（立命館大学考古学論集刊行会、2001）

⑪　前掲註⑩

⑫　米川仁一「大和横穴考」『國學院大學考古学資料館紀要』加藤有次博士追悼　第21輯（國學院大學考古学資料館、2005）

⑬　河野勝行「五－六世紀における伊勢－「神宮」成立史研究のための試考」大阪歴史学会編『古代国家の形成と展開』（吉川弘文館、1976）

⑭　竹田憲治ほか『伊坂城跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2003）

⑮　伊藤徳也「複合資料による中世城郭の復原的考察（2）」（『伊勢の中世』第108号　伊勢中世史研究会、2004）

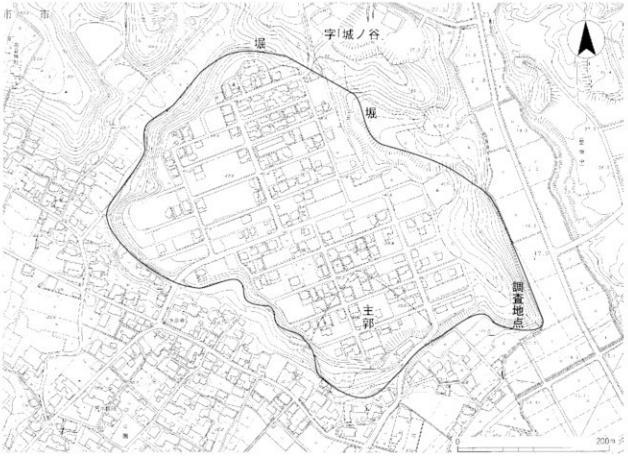
⑯　前掲註①

参考文献

池上　悟　『日本の横穴墓』（雄山閣出版、2000）

池上　悟　『日本横穴墓の形成と展開』（雄山閣出版、2004）

伊藤徳也　「北伊勢における中世城郭の現状」（『研究紀要』第６号　三重県埋蔵文化財センター、1997）



第64図　広永城跡概念図（１：5,000）

写　真　図　版

調査前風景（南から）

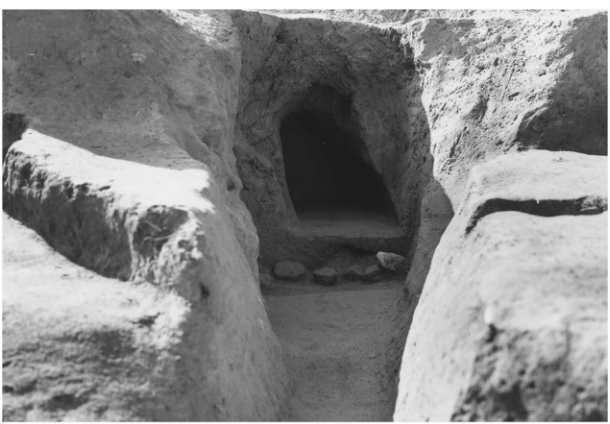
遺跡全景（上空から）

図版 2

調査区全景（南から）

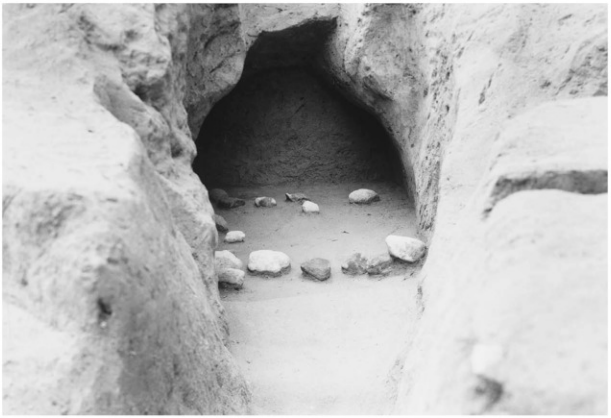
横穴墓群（北から、向かって右側から1号墓・2号墓・3号墓）

横穴１号墓　ＳＸ１（北から）

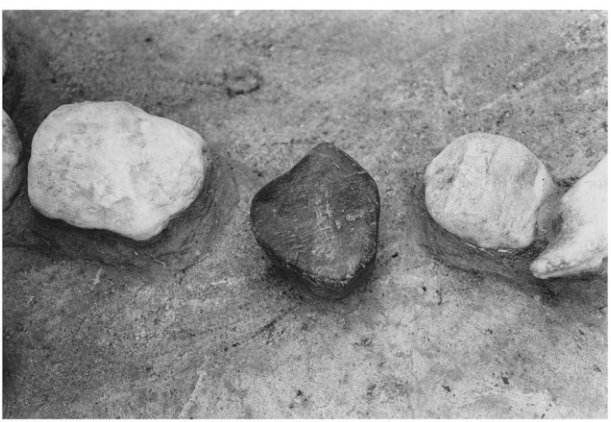


横穴１号墓半裁状況（北から）

図版 4



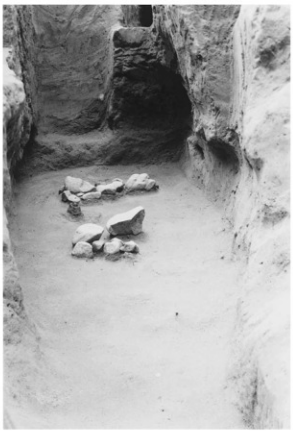
横穴 1 号墓礫出土状況（北から）



横穴 1 号墓線刻礫出土状況（北から）

横穴 2 号墓　SX11（北東から）

図版 6



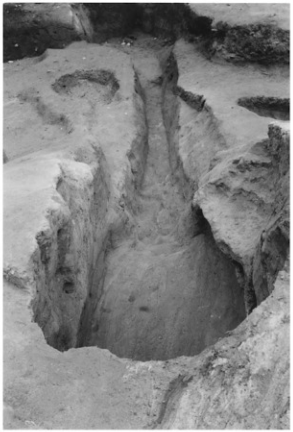
横穴 2 号墓玄室礫出土状況（北東から）

横穴 2 号墓土層堆積状況（垂直）

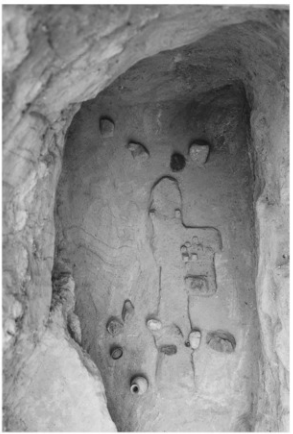
横穴 2 号墓土層堆積状況（北東から）

横穴 3 号墓　SX 7（東から）

図版 8

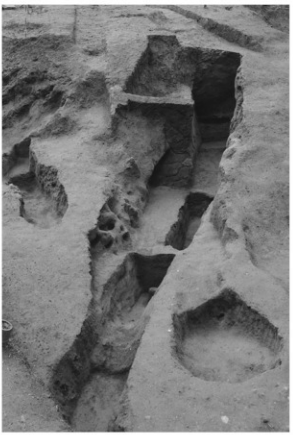


横穴 3 号墓（頂部より墓道を望む）



横穴 3 号墓玄室内遺物出土状況（垂直）

横穴 3 号墓人骨出土状況（東から）



横穴 3 号墓（北東から）

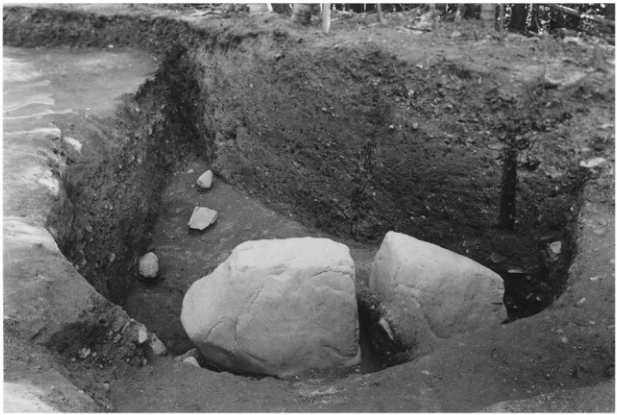
横穴 3 号墓墓道部遺物出土状況（東から）

土器集中部遺物出土状況（東から）

図版10

広永１号墳　SX13（南から）

広永１号墳玄室（南東から）



広永１号墳玄室奥壁（北から）

奥壁石材（南から）

図版12

広永１号墳玄室内大刀出土状況（垂直）

金銅装大刀鞘口金具（西から）

方形周溝墓SX 3（北から）

北側周溝遺物出土状況（北から）

図版14

広永城跡（東から）

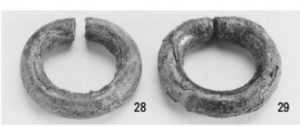
広永城跡土塁（東から）

工事前遠景（南東から）

工事後遠景（西から）

図版16

横穴 1 号墓出土遺物



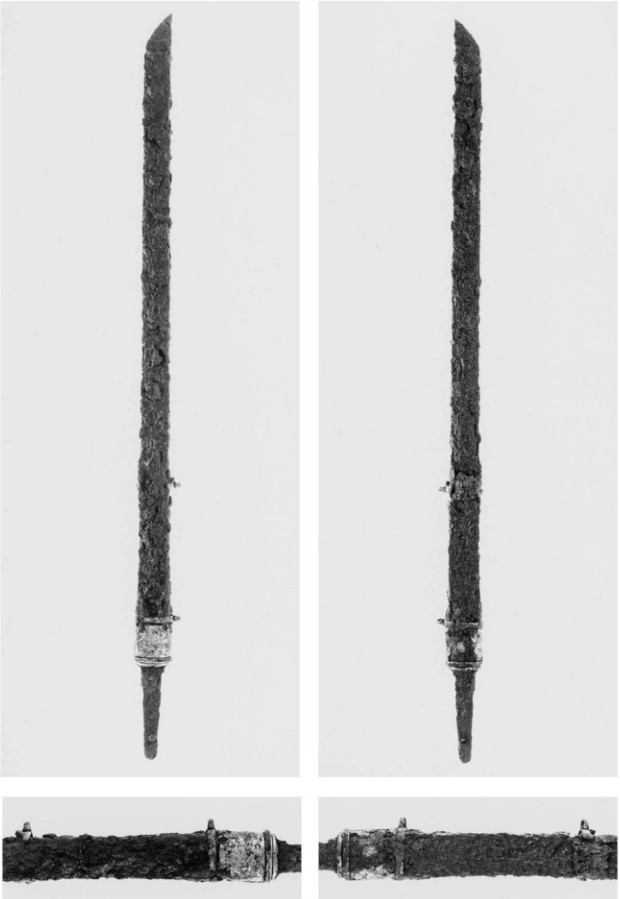
横穴 2 号墓出土遺物

図版18

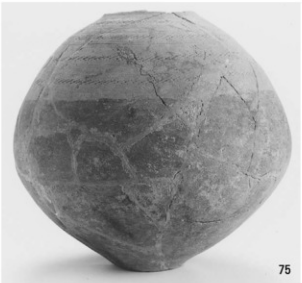
横穴 3 号墓出土遺物

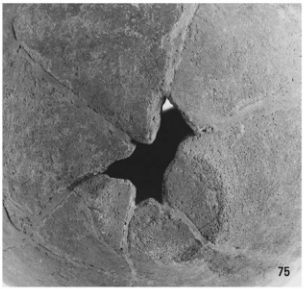
広永 1 号墳出土遺物

図版20



広永１号墳出土金銅装大刀





広永遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ひろながおうけつぼぐん・ひろながいちごうふん・ひろながじょうあと・ひろながいせきはっくつちょうさほうこく
書名	広永横穴墓群・広永１号墳・広永城跡・広永遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２２７－８
編著者名	執筆：角正淳子・竹田憲治 写真図版：竹田憲治・田中久生
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒５１５－０３２５　三重県多気郡明和町竹川５０３　℡０５９６－５２－１７３２
発行年月日	西暦２００６年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ひろながおうけつぼぐん 広永横穴墓群	みえぐんあさひちょう 三重郡朝日町	24343	25	旧 35°01′45″ 新 35°02′03″	旧 136°38′47″ 新 136°38′29″	19980702 ～ 19990114	970	近畿自動車道名古屋神戸線（第２名神）愛知県境～四日市JCT建設事業
		24202						
ひろながいちごうふん 広永１号墳	いずれ 埋縄	24343	24					
		24202						
ひろながじょうあと 広永城跡	よっかいちし 四日市市 ひろながちょう 広永町	24343	21					
		24202						
ひろながいせき 広永遺跡		24343	26					
		24202						

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
広永横穴墓群	横穴墓	古墳時代	横穴墓	須恵器・滑石製丸玉・耳環	出土量：32.6Kｇ
広永古墳群	古墳	古墳時代	横穴式石室	大刀・須恵器	
広永城跡	城館		土塁・堀切		
広永遺跡		弥生時代	方形周溝墓	弥生土器	

要　約	古墳時代後期では横穴墓群と古墳を確認した。同一丘陵上に異なった墓制がみられることが興味深い。横穴墓群は特に丘陵頂部に向かって造墓されており、墳丘を意識した可能性が高い。 広永城としては曲輪と土塁、堀を確認した。調査区は城の南東端にあたり防御の重要地点であったと考えられる。

三重県埋蔵文化財調査報告227－8

広永横穴墓群・広永１号墳・広永城跡・広永遺跡発掘調査報告

2006(平成18)年３月

編集発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　共栄堂印刷株式会社